
魔法少佐アナベル・ガトー

無目藻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少佐アナベル・ガトー

【Nコード】

N5500Y

【作者名】

無目藻

【あらすじ】

アナベル・ガトー。ソロモンの悪夢。

かれは戦死後、不思議なことに高町なのはとして再び人生を歩んでいくこととなった！

武人の誉れを尊ぶ少女、高町なのは！彼女が空を駆けるとき、戦士達の叫びが木霊する……。

無印編終わりました。

第一話 プロローグ（前書き）

注意！Caution！

この二次小説は非常にカオスなものとなっております。

原作陵辱を嫌う方、ロリなガトーを許容できない方、変な文章についてこれない方、ニナ・パープルトンの声とパン工場で働く女性の声と同じだということに驚きを隠せない方、シーマ様とクレシんの風間君が同じ声だと知らなかった方、アクシズ先遣艦隊の方、心臓の弱い方にはお勧めいたしません。

第一話 プロローグ

アナベル・ガトーは連邦軍から『ソロモンの悪夢』と恐れられたモビルスーツパイロットである。

そんな彼は宇宙世紀0083年11月13日、星の屑作戦完遂の後、小惑星アクシズへ向かう同志を護るため散った。

散った、と言っても死んだ訳ではない。

いや、確かに肉体的、医学的には間違いなく死んだ。

しかし、彼の不屈の魂は滅びず、時空を越え、ある世界のある街のある少女に入り込んだ。

そして、その少女は後に『海鳴の悪夢』と呼ばれるようになる。

side アリサ・バニングス

「なのは〜!」

私は親友の名を呼んだ。

その親友の名は高町なのは。この私から二つ名を剥ぎ取った張本人だ。

私はちよつと前まで『不死身の第四小队』とか『不死身の釘宮』と呼ばれていた。いや、由来は知らないけど。

でもある日、クラスで傍若無人に振る舞っていた私になのははピントを喰らわせた。

『何するのよ!?!』

私は当然怒る。でもね、なのははその後私のことをキツと睨んだんだ。

『情けない!』

そうだったときのあいつの目はまさしく『サムライ』だった。

その後、当然のごとく喧嘩になったんだけど、なんか殴りあって

るうちに友情が芽生えたんだ・・・って何処の青春ドラマだよ。

そんなことはさておき、私が声をかけるとなのははこちらに顔を向けた。

「おお、アリサか」

「すずかは？」

「じきに出てくるだろう。やつは友との約束を破るような女ではない」

なのはの目はどうみても小学生の目じゃない。数々の戦いを経験した戦士？そんな感じだ。

でも、私ともう一人の親友、すずかは何故かなのはと気が合っただよね。

side out・・・

続く

第一話 プロローグ（後書き）

とりあえずプロローグです。次回からなのはことガトーさんメインとなります。

優先的に書かなければならないものがあるのでこれの更新はかなり不定期になると思いますが、どうかよろしくお願いいたします。

第二話 魔法の呪文はアナベルなの（前書き）

この形式の書き方ははじめてなので精進していききたいです。

第二話 魔法の呪文はアナベルなの

side なのは（ガトー）

私は高町なのは。

実際はアナベル・ガトーというのだが、いつのまにかこうなっていた。

初めは驚いた。私は誇り高きジオン公国軍人だったはずだ。

それが目が覚めるとこのようないけな少女になっていたのだ。・・・ところが、悲しいことに私はそれに慣れてしまった。いや、それはそれで満足している。新しい次元の友人もでき、家族の温かみを知った。

しかし、私は声無き声で叫ぶ。「違う」と。

私は軍人だったからこそ自分を見いだし、大義を持てたのだ！それを今では無くしてしまった！その虚しさ、そして怒りは私を苦しめた。

が、それも今日で終わりとなる。私はこの世界で自分の生きざまを見いだすことができたのだ。

side out

side 淫獣

待て、待て待て。なんだこの『淫獣』って。馬鹿にしてんのか。

・・・まあ、いい。今はそれどころじゃあないんだ。

僕は取り返しのつかない失敗をしてしまった。

ロストロギアのひとつである『ジュエルシード』を取り込んだ生き物をとらえ損ねてしまった。

くそ・・・なんで僕はっかりこんな目に・・・誰かに手伝ってもらわない限り無理だったの。

ハッ！いけない。ユーノ・スクライア、落ち着け。今このような

状況を産み出した老人方に対する罵詈雑言を並べ立てたところで僕は救われないぞ！

でも、手伝ってくれる人が必要なのは確かだ。

「・・・だれか・・・この声を・・・」

僕は必死に訴えた。まだ顔も見ぬ、相棒の存在を信じて・・・。

「だれか、僕と契約して魔法しようじ・・・ゲボハアツ！」

side out

sideなのは

「ここからだと近道なんだ」

アリサがそういうのなら事実なのだろう。

私とすずかはアリサの後ろに続いた。辺りは薄暗くなり始めている。

「なのはちゃん・・・なんか、不気味だね」

「心配ない。ただの木だ」

「なのはちゃん、怖くないの？」

「私は義によつてたつてているからな！」

「意味わからないよ・・・」

と、ここまで他愛もない会話を交わしていた。

しかしその時、私の頭へ何者かが直接言葉を訴えていた。

「声・・・？」

どうやらこの声は私にしか聞こえていないらしい。二人は呆けたような顔をしている。

「なのは・・・？」

アリサが声を掛けてきたが私はそれに答えなかった。

何故ならば私はその時すでに走り始めていたからだ。

二人の呼ぶ声を背中に聞きながら、私は沸き上がる激情に身を委ねていた。

暫く走っていると、一匹の動物の横腹を盛大に蹴ってしまった。

(ゲボハアッ！)

「しまった！」

私は急いでその動物のもとへ駆け寄る。

「これは・・・^{フェレット}淫獣か？」

^{フェレット}その淫獣は首に赤い宝石をつけていた。

「なのはー！」

「なのはちゃん」

私に置いていかれていた二人も追い付いた。

「二人とも、見る」

息を半分切らしている二人に先程横腹を蹴ってしまった生き物を見せた。

「あれ？これ^{フェレット}淫獣じゃない？」

「本当だあ。捨てられたのかな？横っ腹怪我してるみたい」

まさか「私が蹴りを入れた」なんて言えるはずがない。^{フェレット}淫獣処置は二人に任せることとした。

side 淫獣

何なんだよオオオオオオオ！

こいつらなんで普通に^{フェレット}フェレットって言わねえんだよ！

あげくのはてには獣医さんにも言われたよ！

「んー(；>―<)これホントに^{フェレット}淫獣？それにしても誰かしらね、横っ腹を蹴るなんて酷いことしたのは」

僕を淫獣って表記するのは残酷じゃないのかよ！

それに僕を蹴り飛ばした奴。あつ。目が合ったらアイツ目をそらしたぞ！？

・・・それにしても、このサムライオーラ全開の女の子が僕のパートナーとなる？

なんてこった。

僕は心のなかで偉大なる聖王女オリヴィエに祈った。

どうか生きて最終回を迎えられますように・・・。

side
out
続<

第三話 ソロモンの悪夢なの（前書き）

結局いつもの文体に戻りつつある今日この頃。

第三話 ソロモンの悪夢なの

淫獣^{ユウノ}は現在腹に包帯を巻いた状態で動物病院のケージのなかにいる。

「くっそう・・・治癒魔法使ってるのにまだ痛いよ、もう」

そんな感じで文句をブツブツ呟いていると外に気配を感じた。

「!?・・・これは・・・」

少し痛む身体を動かし窓の外が覗ける位置へ移動する。

外には月明かりに照らされたあのジュエルシードのもちやもちや（どう表現してイイかわかんないんだもん）が蠢いていた。

淫獣^{ユウノ}はすぐさま数時間前に会ったおっかない少女へ念話を飛ばした。

「聞こえますか・・・貴方の力が必要です・・・」

「なんとっ!？」

なのはは驚きの声を上げた。

「この声は・・・先の淫獣^{フェレット}か・・・?」

なのは いや、アナベル・ガトーという男は困っている人を無視できない性格なのだ。

なのはは淫獣^{フェレット}の抗議の声を完全に無視して家をこっそりと、迅速に抜け出した。

淫獣^{ユウノ}は電柱の陰に隠れながらジュエルシードのアレを観察していた。

そこへ例の少女がやって来る。

「やあ！半分は嘘になるけど待ってたよ！」

「やはり君か。何なのだあの生物は？」

淫獣 ルビつけんのめんどくさくなっちゃった は少女（なんだか“少佐”の方が似合う気がするのは気のせい?よし、今から少佐

だ。」にジュエルシードについて軽く説明した。

少佐は心得たのか頷く。

「よしわかった。つまり、私とそのジュエルシードの回収を手伝え
ばいいわけだな？」

淫獣はイエスの返事をして、快く引き受けてくれた少佐に赤い宝
石を渡した。

「？何だこれは」

「これは“レイジング・ハート”。いわゆる魔法の杖みたいなもの
さ」

「ふむ、これはアレか？呪文を唱えるのか」

淫獣は予想以上に飲み込みの早い少佐に感激する。

「そう！君は僕の言うことをそのまま繰り返して！」

なのはが言われた通りに呪文を繰り返すと、全身をまばゆいばか
りの光が包み込んだ。

「何っ！？」

光に包まれたのもつかの間。一刹那後には光が解け、そこには先
程までとは違う服を着たなのはが立っていた。

基本デザインはなのはが通っている小学校の制服をイメージした
ものとなっている。どうやら、この服装には本人のイメージが反映
されるらしい。

しかし、なのはが目をつけたのはそこではない。

なんと、その服のカラーリングパターンが嘗ての自分が使用して
いた「ゲルググ」のカラーリングそのものだったのである！

「おお！まるで、ジオンの精神が形となったようだ！」

淫獣は頭の上に「？」を浮かべていたが、知ったことではない。

「淫獣君！」

「せめてルビはつけてくれ！で、なに？」

「武器の形状は変えられないのか？」

「ん、レイジング・ハートに聞いてみてくれ。それには人工知能

が搭載されているんだ」

面白い。なのはそう思い、レイジング・ハートに問いかけようとした。すると・・・。

《・・・ガトーよ》

「ハッ！？デラーズ閣下！？」

後ろで淫獣が「あつれえ！？こんな声だっけ！？」と戸惑いの声をあげている。それをやはり無視してなのは丁寧に問いかけた。

「デラーズ閣下、貴方の形状は変えることができるのでしょうか？」

《できる。貴公は、儂がそのようなことも出来ぬ老人だと思つか？》

「いえ！滅相もございません、閣下」

なのはがそう言うとデラーズ・ハート（勝手に命名）はなのはの要求した形、ゲルググ用のビームライフルへと変形した。

《行け、ガトーよ！》

デラーズ・ハートの激励の言葉で久々に戦士の魂を奮い立たせたなのは アナベル・ガトーはジュエルシードのアレの前へと飛び出した。

淫獣^{ユウ}には何が起きたか理解できなかった。ただ、言えることはその少女 高町なのははとんでもなく強く、とんでもなく“漢”だと言うことだ。

なのははジュエルシードのアレの前へ飛び出した後、十数メートルの高さへ跳ねた。

「南無三！」

なのはがビームライフルの引き金を引く。銃口から放たれた魔力粒子の塊は見事にジュエルシードのアレの肉体を抉った。

「グオアアアア！！」

ジュエルシ（以下略）は一応痛覚らしいものはあるようで、痛みによる咆哮を上げた後その変態的触手を数本なのはに放った。

「遅おい！」

しかし、9歳とはいえ伊達にソロモンの悪夢ではなく、嘗ての勘

を取り戻した彼女はそれらを全て避けきった。

落下に身を任せながら正確にビームライフルを連射する。

ビビユウン！バビユウン！

「アアアアアアア・・・！」

ジュエ（以下略）はビームに串刺しにされた挙げ句、断末魔の叫びを冷たい夜の空気に残して消滅した。

「す、すごい・・・」

「この蒼い宝石を封印するのだな？」

なのはの見た目に似合わない華麗な戦いぶりに声もでなかった淫獣だがなのはに問いかけられてハツとした。

「う、うん！そうだよ」

「そうか。では、閣下、お願い致します」

《ウム》

なのははデラーズ・ハート扮するビームライフルの銃口をジュエルシード（本体）へと向けた。

「ジュエルシード、封印！」

なのはがそう唱えるとジュエルシードは蒼い光となってビームライフルの銃口へと吸い込まれていった。非常にシニールである。

《ガトー、見事であった》

「ありがとうございます、閣下」

その後、遠くからパトカーによるサイレンの音が聞こえてきたため、ズツタズタになった道路や誰かの家の塀を残して一人と一匹と一機はその場から逃走した。

続く・・・

第三話 ソロモンの悪夢なの（後書き）

次回予告

なのはは学校で友達のアリサ、すずか、はやてに淫獣について問い詰められ、ついには淫獣の正体を吐いてしまう。

それを立ち聞きしていた担任の先生は悪魔の計画を実行に移すのだった・・・。

次回、「光る宇宙」君は、鵜の涙を見る

caution!これはほぼ嘘予告です。正確な部分は二行目21字目までだけです。

第四話 淫獣との同居生活が始まるの

私立聖祥大附属小学校。そこが高町なのはの通う学校である。

「おはよう！」

なのは今朝も漢気溢れる挨拶を教室内に響かせた。

「おはよう、なのは」「なのはちゃん、おはよう」「おはよう、少佐」

その挨拶に友人の三人が返事をくれた。

一人はアリサ・バニングス。通称『釘宮小隊』。もう一人は月村すずか。物静かだが、言うときは言う地味に頼れる少女。もう一人は八神はやて。関西弁が特徴の車椅子少女。因みに彼女は何かなのはを少佐と呼ぶ。なのははそれをとつても気に入っている。

「少佐、昨日淫獣フェレットひろたんやて？」

予想通り、その事について聞かれた。はやては昨日は病院に行っていたため、帰りは一緒ではなかったのだ。

「ああ、確かに淫獣を拾った。動物病院送りだったがな」

「ね、ね、なのはちゃん、あの後、淫獣の様子見に行ったりした？」
なのははすずかの質問にドキリとした。

まさか、見られていたのか！？

が、どうやらそれは杞憂だったようで、彼女は純粹に淫獣のことが気になっているだけのようだ。

「ま、まあ、そうだ・・・」

まさか「その淫獣から魔法の力を授けられて変な生き物とドンパチやりました」と言うわけにもいかない。

と、言うわけでそこは事実を織り混ぜた嘘で誤魔化した。

「よかったじゃん！」

基本的に疑り深いアリサも信じてくれたようだ。

「しかし、問題は家に帰ってからだった・・・」

先のは基本嘘だったが、これから話すことは事実である。

~~~~~

なのはが家に帰ったのは結局十一時ちょい前であつた。

このまま堂々と玄関から帰宅したらお父さんのお仕置きデストロイヤーを食らうこと必須だったため、屋根を上つて二階の窓から屋内へ入ることにした。

なのはは気配を消して玄関前を横切ろうとした。その時！

「・・・何をしている」

なのはは急速に身体を捻り、身を構えた。伊達に前世は軍人ではない。

しかし、そこにいたのは別に不審者でも何でもないのはの実兄、高町恭也であつた。

彼の手には何やらスイッチ的なものが握られている。

「どこに行つていた。言わないとお前を殺す」

実は高町恭也は去年の暮れに近所の暴走三輪車に轢かれてそれ以来「非異炉病<sup>ヒイロ</sup>」という未知の病に侵されているのだ。この非異炉病、怒つたりすると自分には自爆装置が組み込まれていると思ひ込んでしまふ世にも恐ろしい病気なのだ。

「お前を・・・・・・・・・殺す」

「なにしてんの？」

そこへ姉の美由紀が襲来する。

「あつ！なのは！お父さん心配しすぎて鼻からコーラ飲んでたよ！」

鼻からコーラを！？これは一大事である。美由紀姉もどうやら立腹のようだ。

しょうがない、と、漢なのはは覚悟を決める。

「ねーねー、お姉ちゃん、この淫獣家<sup>フェレット</sup>においてあげていいでしょー？」

今だけ赦される禁断の奥義、だっ子、である。

この奥義は自分に降りかかる災難を回避する代わりに精神的ダメージを受けるという諸刃の刃である。

(く、屈辱・・・！)

が、どうやらこの奥義は功を成したらしい。

「あら！可愛い淫獣ねー」

美由紀姉は可愛いものに弱いのだ。

「もう、しょうがないわねー。父さんと母さんには私から言つとくわよ」

なのは心のなかで歓喜の声をあげる。

「お前を・・・・・・・・・・・・・・・・・・殺す」

「兄さん黙ろつか。潰すよ」

「・・・・・・・・・・」

~~~~~

「えっ？じゃあ拾った淫獣は少佐ん家で飼うことになったんか！？」

「まあ、そういうことだな」

アリサとすずかもオオー、と驚きの声をあげている。

「それにしても淫獣飼うの、おばさんはともかく、おじさんが許すなんて意外ね」

それに関しては簡単である。

一応のところ父、士郎が大黒柱として家計を支え、家族を守っているわけだが、時折その力を母桃子が凌駕するのだ。

その時は士郎が鼻からコーラを飲むという暴挙に出ていたため、まさしくスーパー桃子タイムだったと言えるよう。

「スーパー桃子タイムの間は母が白と言えば黒でも白になるのだ」

「なのはの家族ってすごいね・・・」

アリサがなんとも言えない顔でそう評価した。

~~~~~

その週の休日、アリサ、すずか、はやては高町なのはの住みかである喫茶店「翠屋」に集まっていた。目的はもちろん、高町家の扶養家族となった淫獣フェレットを見ることである。

「これが例の淫獣フェレットの淫獣だ」

ユーノはなんとも言えない顔をしていた。

彼はなのはと同年代の少年だ。こんな美少女達にもみくちやにされるなどもつと喜んでイイはずだ。第一、この世界に淫獣じゃない男なんているかい？

それでもユーノの顔は晴れなかった。その原因は彼をいじりまくる少女達である。

「淫獣君カワイー！」「淫獣くーん！」「淫獣の淫獣かあ。エエ名前やなあ」

やっぱりお前らもかよ。僕を淫獣と呼ぶのかよ。

いや、わかつてるよ？「淫獣」と書いて「フェレット」もしくは「ユーノ」と呼ぶことぐらい。わかつてるさ。でも、やっぱり凹むよ。

何だよ、「淫獣の淫獣かあ」って。意味わかんねーよ。淫獣の二乗かよ。これに位はルビつけるよ作者アアア！

そんなこと思いつつも今の状況を満喫している淫獣君<sup>ユーノ</sup>。

次回からはユーノ<sup>淫獣</sup>と表示してやろうと決意する作者であった。

続く

#### 第四話 淫獣との同居生活が始まるの（後書き）

次回、早くもあのパツキンさんが登場！

合言葉は

「ニンジン、いらないよぉ・・・わぁー」

感想、ご意見、お待ちしております。

## 第五話 ジュエルシード強奪なの（前書き）

べつに強奪する訳じゃ無いけどね。

## 第五話 ジュエルシード強奪なの

ユーノは夢を見ていた。

ユーノ。

「ハッ！その神秘的なオッドアイ！聖王女オリヴィエ殿下！てか、文章のなかで僕が普通に名前と呼ばれている！」

そうよ。貴方は今回からたまにしか淫獣呼ばわりされないのよ。たまには言われるのかよ。それにしても、それはまた何故・・・？」

この小説の感想でこの淫獣というフレーズはたまに使ってから面白が増すのでは、という意見が書き込まれていてね、作者が「確かに」と思ったわけなのよ。

「なんというメタ発言」

それにいちいちルビついたりするのもしんどいしね。

「これはまたとんでもないメタ発言だ！」

因みにこの件は問題があったりしたら自動的に消されるわよ。

ほら、起きなさいユーノ。なのはちゃんが呼んでるわよ・・・。

『ユーノ、ほら、起きろ』

なのははバスのなかで念話によってユーノを夢の園から引きずり出そうとしていた。

『んん、なのは・・・』

『もうすぐ目的地だ』

見た目は美少女、中身はアナベルな彼女は友人の月村すずか宅にお茶のお誘いを受けているのだ。今はその移動中である。

「なのは、やっぱりお茶のお誘いは嬉しいか？」

今回のお出掛けはなのはとユーノだけでなく、兄の恭也も一緒だ。恭也とすずかの姉、忍はとってもイイ仲なのである。



「私の心は今の海鳴のように震えている」

「ハハハ。そいつはよかった」

なのはの中身、つまり、アナベル・ガトーはお茶会なぞ興味のひとつもわかないのだが、女の子という肉体に刻み込まれた女の子の部分があるようなお洒落なものを求めているのだ。

『何故少女はこのようなことをやりたがるのだろうか』

なのはは何時もそう思っていた。

月村邸は豪邸である。すずかは町の喫茶店の娘とは歴然とした差があるお嬢様だ。

その庭園の一角にあるテーブルになのはを含め四人少女が座っていた。

ユーノは彼女等の足下で猫と遊んでいる・・・ように見える。

「あゝあゝ、すずかちゃんは猫、アリサちゃんは犬、んで少佐はフエレットかあ。エエなあ。動物」

はやては両親に先立たれ独り暮らしなため非常に孤独だ。しかも体が不自由なため、その代償行為として動物の存在を欲していた。

しかし、作者は言う。心配するな。じきに四人のお母さんとなる。四人はしばらくペット談義で盛り上がったが、なのはにそれを中座せざるを得ない状況が発生する。

《ガトーよ》

デラーズ・ハートからの呼び掛けになのはは応じる。

『どうされましたか？』

《近くにジュエルシードの反応がある》

『なんと！？』

なのははハッとユーノを見た。彼も気づいているらしく、少し頷くとユーノは猛スピードで駆け出した。

「あれ？ユーノどうしたの？」

「あつ、ユーノは散歩にいききたいそうだ。御免！」

なのははユーノを追って駆け出した。

近くの森の中、一人の金髪少女が木の上に腰かけていた。

『フェイト、一人で大丈夫？』

彼女の脳内には優しい相棒の声が響いている。

「大丈夫だよ、アルフ」

フェイトと呼ばれた少女は自らの手にあるデバイスを見つめた。

「それよりもアルフ、バルディッシュの新しい身体はスゴいよ。前のやつと比べるとパワーも桁違いだし、エネルギー伝達システムも5%速度が上がってる！変形機構もシンプルかつ多彩になって他にも」

『はいはい！分かったからジュエルシールド早いところ回収しちゃう！』

フェイトはうん、と返事をしてデバイスを起動させた。

そのころ、なのはとユーノは驚きの光景を目の当たりにしていた。かつてはソロモンの悪夢と恐れられた前世を持つ彼女も驚きを隠せないことはある。

二人の前には超がつくほどでっかい猫がいたのだ。

「ユーノよ。あの猫は何故あんなにでかいのだ！？」

「きつとあの猫が『BIGになりてえ』と願ったんだろうねえ」

理由がわかったところでなのははデラース・ハートを起動する。

「ジーク・ジオン！」

そう唱えると、彼女は一瞬の後、ガトール専用ゲルググのカラーリングのバリアジャケットにビームライフルという出で立ちとなった。なのはは木の影からビームライフルの照準をBIG猫に合わせ、引き金を引く。

銃口から伸びた数本のビームはBIG猫の身体の様々な場所に当たり、見た目に似合わず可愛い声をはたてながらBIG猫は昏倒した。

「ふん、鎧袖一触とはこの事か・・・」

猫はジュエルシードと分裂し、起き上がったかと思うと猛スピードで逃げていった。

ビームライフルの銃口をジュエルシードに向ける。

「このジュエルシードはいただいて行く！」

《封印》

ジュエルシードは蒼い光となってデラース・ハートに吸い込まれていった。

「これで、よし・・・ッ!？」

安堵の吐息を漏らそうとした瞬間、なのはは近くに気配を感じた。気配の根源はなのはの近くの木の上からだ。

「・・・何者だ!？」

金髪の少女はなのはの十数メートル先に降り立った。

「貴方にジュエルシードを渡すわけにはいかない！」

金髪少女　フェイト・テストロッサはサイスマードのバルディッシユを構えた。

「ふむ、意気込みはよし。だが、相手が子供ではな」

お前も子供だろ!？、とユーノは近くの茂みでそう思ったが、口には出さなかった。何故か出してはいけない気がする。

「であつ！」

フェイトは小さな気合いの声ともなのはに切りかかった。彼女の攻撃は速く、正確であつた。しかし、なのはにそれをかわされる。「!？」

どこへ行つた？戦闘中に敵を見失うのはあつてはならないことであるが、フェイトはそれをおかしてしまった。

首を素早く巡らしていると背中を強烈な衝撃が襲う。

「かはっ・・・」

なのはのシオルダータックルは結構効いたようで、軽く数メートル吹き飛んだフェイトは地面に叩きつけられた。

「く、く・・・」

背中痛みをこらえながらフェイトは立ち上がる。が、しかし。

「！」

彼女が顔をあげたとき、喉元になのはのビームナギナタの切っ先が立てられた。

「私と闘うには君はまだ、未熟・・・！」

なのははそう言っているとビームナギナタを納め、空へ飛び上がった。

「未熟だとお！」

森の中にフェイトの悔しさによる叫びが木霊した。

この闘いはなのはとフェイト、初めての邂逅として二人の記憶に深く刻み込まれることとなる。

因みにユーノ君はなのはが飛んだため、少し走るはめになりましたとさ。

## 第五話 ジュエルシード強奪なの（後書き）

先頭シーンをもっとうまくかけようになりたい。

しかもラストなんかフェイトさんが主役っぽいし。まあ、主役であることに間違いはないのだけれども。

## 第六話 熱湯の攻防なの（前書き）

文の組み立てがうまくできない。

## 第六話 熱湯の攻防なの

翠屋は年中無休が売りな訳だが、たまに店をバイトさんや店員さんに任せて家族総出でお出掛けしたりする。

そして、今回は高町家の面々以外にアリサや月村家の人々、はやて（車椅子は折り畳んで後ろさね）といった面子も揃った非常に賑やかなものである。

『温泉か・・・』

なのはもガトー時代に一度聞いたことはある。

なんでも、この世のものとは思えないほどキモチイとか。

実はなのはは昔一度温泉には来ているのだが、昔のこととして忘却の海へ沈めているのだ。

その温泉は海鳴市の山手の方にあり、知る人ぞ知る隠れた名所だ。本当、海鳴市にはなんでもあるな。

前世がコロニー育ちのなのはにとってはやはり天然の森林というものには心引かれるものがある。

「閣下、これが地球の森林です」

《うむ、やはりコロニーのものとは違い活力に満ちておる》

かつてはコロニー落としを画策した二人であるが、このような景色に触れるとそれが真に正しいものだったかどうか揺らいでくる。

『しかし、スペースノイドの真の解放には必要だったのだ・・・』

「なのは、どうしたの？」

長考の埒塙入りかけていたなのはをアリサが引きずり出す。

「おお、アリサ」

「早速温泉に入ろうよ」

見ると、アリサ、すずか、はやての手にはどこから取り出したか風呂桶とタオルがあった。

なのはは短く返事をして彼女たちのもとへ向かった。

ユーノ・スクライアは窮地に立たされていた。

「む？ユーノ、君も入るのだ」

「なのは、その・・・僕は一応男だからさ、士郎さんたちのいる男湯に・・・」

「何を照れているのだ？」

なのははユーノの首根っこを掴んで背を向けていた身体を正面に向けた。

ユーノの視界に肌色が広がる。

「グハアッ！」

「よくわからんな・・・」

なのはは苦笑する。

因みに見た目は美少女、中身はアナベルなこの人が女湯に入っても平気なのには理由がある。

アナベル・ガトーは御年25歳の青年であつた。その為、本人が意識せずとも体が反応してしまった。

しかし、今はアナベル・ガトーではなく、高町なのはという女性の体を持つため、女性にたいして全くもって反応しないのだ。

少し前までは多少の躊躇はあつたが、慣れた。

そのようなことを微塵も知らないユーノは最後の抵抗として丁寧に畳まれた衣服の上に鎮座しているデラース・ハートに助けを求める眼差しを向けた。

《・・・行け！ユーノよ！》

だが、あつさり突き放された。

「何をしている！速くしないと皆に迷惑がかかるだろう！」

「嫌だ・・・ここで抵抗をやめると大切なものを失いそうな気がする」

「はあ。貴様、淫獣ユーノの風上にもおけんな」

「置かれたくなんてねえよ！・・・あつ！ちよ」

結局、ユーノの奮闘むなしく彼はなのはに首根っこを掴まれ女性性が群がる湯船（動物でもOKらしい）に強制投入されたのだった。



数十分後

久々に長湯をした少女四人組はイイお湯だったねー、とありふれたことを話ながら廊下を歩いていった。

「ん？ユーノ君顔真つ赤やけど・・・」

「ほんとだ。毛が生えてても逆上せると赤くなるんだね」

彼女達はもちろん何故彼が赤いのかなぞ知らない。

氷でも当ててやろうか、なんて話していると向こうからいわゆる

ナイスバディーな女性がハイテンションで歩いてきた。

「ハアイ、オチビちゃん達」

女性は四人のことを品定めするような目付きでじつとりと眺めた。アリサが嫌悪を示す。

女性の視線はなのはのところで止まった、が、一瞬ニヤリと笑ったら「なんでもないわ」と再び歩みだした。

そして、すれ違いざま、なのはの頭に直接声が響いた。

「君？ウチのフェイトを打ち負かしてくれちゃったのは」

「何？」

なのはが振り向くと女性が先程と同じような笑いを顔に浮かべながらこちらを見ていた。

「ン、そんなに強そうでも、賢そうでも無いけどね・・・とにかく、お嬢ちゃんはお家で寝てるべきだよ」

そう言つと、女性は踵を返して去っていった。

「見たところ何でもないただのチビスケだったけどねえ。フェイト、ホントにあいつにやられたのかい？」

女性はなのは達の入った風呂に入って自分が仕える少女と念話で会話をしていた。

「ホントだよ。だから今勝つためにバルディッシュの調節してるんだ」

「調節・・・？」

女性は聞き返す。

『うん。“バルディツシュ・ゼフィランサス”は主に地上戦向きの機構だから空間戦闘にはどちらかと言えば不向きなんだ。今まで空を飛ぶ奴がいたわけでもないからね。直ぐには換装できないから応急措置として重力制御率を3%下げて、推進率を20%上昇・・・』

『あー！もうわかったからさ！ジュエルシードは見つかった？』

女性は機械についてはからきしダメなのだ。

『反応はあるんだけど、場所がよくわからなくて・・・』

『よし！私も風呂から上がったなら手伝ったげるよ！』

女性の頼れる宣言に少女は感謝の言葉を述べた。

なんやかんやの内に日は沈み、辺りを静かな闇が支配した。

夕飯を終え、歯磨きなどを終えた少女四人は少し談笑したあと大人たちより一足先に床につくことにした。

「では、我々は先に失礼する」

「そうか。なのは達も疲れたか。イイ夢見るよ」

恭也はどうやら子供たちには早く寝てもらいたいと思っているらしい。忍とイイ雰囲気だ。

なのはも中身は大人でも身体は子供だ。ある程度の時間になると眠くなる。

四人は電気を消し、一斉に布団に入って一斉に眠りの女神に身を任せた。

・・・・・・・・・・。

《・・・ガトーよ》

デラーズ・ハートの呼び掛けに応じてなのははガバツと起き上がった。

寝ぼけ眼で時計を見ると時刻は午前0時12分、となっていて、寝たのが10時少し過ぎだったことからおおよそ2時間寝ていたようだ。

目が闇に慣れてきて薄らぼんやりと輝くデラーズ・ハートとエネ

ルギーを節約していたため元氣ハツツウなユーノの姿を捉えた。  
《夜分遅くすまん。ジュエルシードの反応だ》

こくりと頷いたなのは得意の早着替えて浴衣から普段着に着替えたあと外へ静に、素早く飛び出し、デラーズ・ハートの導きに従い走っていった。

そのころ、フェイトはジュエルシードの所在をつかみ、そこに向かっていた。

「あの子は来るか・・・」

そのようなことが頭の中をよぎっていった。

ジュエルシード自体は蒼く光っているため簡単に見つけられる。

フェイトはその光を小川に架かる小さな橋の近くの茂みのなかに見出だした。

先日の少女はまだ来ていないらしい。

フェイトは早速バルディッシュの切っ先をジュエルシードに向け封印の作業を始めようとした。と、その時。

いきなり数条のビームが彼女の足元をえぐったのだ。

フェイトはバルディッシュに戦闘形態をとらせ、後退する。

ビームの飛来した方向を見るとそこには先日の少女　高町なのはが立っていた。丁度橋を挟んだ位置である。

「また貴様か！一度ならず、二度までも！」

そう言うとなのはライフルをナギナタに変形させた。こちらの戦闘スタイルに合わせてくれるようだ。

『アルフ、ジュエルシードをお願い』

『えっ？フェイトは』

『私はあの子を引き付ける！』

フェイトはバルディッシュを振りかざし、なのはへ斬りかかる！

「遅い！」

なのははいつかのようにフェイトの斬撃をかわす。

その時、なのはは空中にいた。

「そこだ！」

フェイトの短い確信の声と共になのはに向かって黄色い光弾を連発する。

「落ちろオオオオ！」

空中だと身動きはまともにとれない、と踏んでの行動だったが、避けられてしまう。

「ダニイ！？」

なのははバランスを崩すことなく着地し、一気に踏み込んできた。

「でああああッ！」

「のああ！」

鋭いスパーク音と共に激しいつばぜり合いとなった。

なのはの斬撃は重く、バルディツシュの機体も軋んだ。

しかし、バルディツシュよりも先にフェイトに限界が訪れる。

そこに踏みとどまっていることが困難となつて吹き飛ばされたのだ。

「あああ！」

今回は変に姿勢を保とうとしたせいで地面と望まぬ接吻をするはめとなった。

「ぶちゅっッ！？」

口に入った砂利を吐き出し、起き上がろうとしたところ、地面にまた叩きつけられた。

視線を動かすと、月光に照らされた逆光で全身真っ黒のなのはが倒れるフェイトの上で仁王立ちしていた。

「貴様はまだ未熟だと言った！」

「でも、私はジュエルシードを手に入れなければならない。あなたを倒さないといけない！」

「貴様に私は倒せん！」

『フェイト！』

！

フェイトの脳内にアルフの声が響き渡った。ジュエルシードを回

収めたい。

これと同時になのはにもユーノから念話が届いていた。

「なのは！ごめん！彼女の使い魔にジュエルシードを持ってかれた

！」

「何！？」

なのはが驚きの声をあげる。

それは一瞬のことであつたが、フェイトにとっては十分な時間だつた。

フェイトはなのはの束縛から逃れる。

「！？」

「次こそは負けない！必ずあなたを倒して見せる！」

それはフェイトからの宣戦布告であつた。

飛び去るフェイトの姿をなのはは無言で見送るのだった。

続くの！

## 第六話 熱湯の攻防なの（後書き）

感想お待ちしております。

## 第七話 時空の管理局なの！（前書き）

いい忘れてましたが、この小説は話の流れが原作とやや違ったりしますが、気にしないでください。

## 第七話 時空の管理局なの！

### 時の庭園

「今まで集めた分が3つ、今回で4つ・・・」

ビシッバシッと叩く音が響き渡る。

彼女はプレシア・テストロッサ。フェイトの実母である。

「少ないわア・・・」

ビシッ！バシッ！

幾度となく叩き、満足したところで叩くのを止めた。

そして

彼女は

叩いていた物を溶き卵につけ、パン粉をまぶし、高温の油でさくつと揚げた。

「フェイトオオ！今日のごはんはトンカツだYO！」

そう、彼女は愛する娘フェイトが頑張れるようにスタミナをつくトンカツを作っていたのだ。

「ダニイ！？トンカツだとおゝ！？」

フェイトが喜びと驚きの声と共に駆けてくる。

「あら？アルフは？」

「もうすぐ来ると思うよ」

フェイトの予告通り、アルフは直ぐにやって来た。

「肉」

「ホラ、早く席について。トンカツが冷めちゃうわよ」

ウハウハでフェイトとアルフ（人型）が席に着く。

しかし・・・フェイトは皿の上にあってはならない物を見つけ  
てしまう。

「・・・！ニンジンはいらないよ・・・」

「なに言ってるのフェイト。ニンジンは目にイイのよ。食べなきゃ」

「・・・アアやっぱり無理！それになんか食べたらダメな気がする」



「キャロット野郎！お前がナンバーワンだ！」

「またそうやって．．．あー！でもかわいい。他の野菜を食べるこ  
とで許す」

フェイトの顔が明るく輝いた。ニンジンとブロッコリー以外なら何でも食べられるのだ。

「そう言えばフェイト、プレシアに言いたいことがあつたんじやないの？」

トンカツをパクついていたフェイトは「ほーばっば！」と謎の言語で返事をし、プレシアがフェイトのために叩きに叩いたためとても柔らかくなつた豚肉を十分に咀嚼して飲み下したあと急にかしこまった。

「お母様」

「あら、どうしたの？椅子の上で正座なんかしちゃって」

「実は、バルディッシュをもう一度カスタマイズしてほしいんだ」  
そう言うと、プレシアはちょっと不思議そうな顔をする。

「ゼフィランサスで何か問題でも起きたの？」

フェイトはかぶりを振った。

「違う違う。実は私ね、なんか妙に強い女の子に負けちゃって」  
 フェイトがそこまで言った、その時！プレシアがガタツと椅子から立ち上がった。

「誰！？その子！？家の娘になにさらしたんじゃアアアア！」

「ちよ、母さん落ち着いて！」

[illegible]

「母さんッ!!」

「ハッ！？」

プレシアは逆立っていた髪を下ろし、汗だくでフェイトを見やっ

「うーめんフイト。つい……」

「もう。確りしてよ。アルフもビビってるよ」

震えるアルフをなだめ、本題に戻す。

「で、その女の子に負けて」

[illegible]

「落ちつけえ！」

「冗談よ。で、その女の子に負けたから、ジュエルシード回収用でなくてもっと立体機動の出来るものにしてほしいわけね？」

母の飲み込みのよさにフエイトは嬉しくなる。

「いいかな？」

「もちのろんでOKよー！フェイトはそういうスタイルの方が得意だしね」

するとプレシアはどこからともなく設計図らしき物を取り出し机に広げた。

「母さん、これ何？」

「前から考えてた“バルディツシュ・フルバーニアン”の基礎設計図よ。ホラ、アルフも見ときなさい」

はつきり言ってアルフはそのようなことに興味がない、というか  
解らなかつた。

「母さん！すごいよこれ！推推力が50%あがつて・・・うわ！エネルギー制御率が三割増し！」

「そうよ！しかもほら！新型のOSを入れることで伝達系機器の反応速度が15%も上がったわ！あと、基礎骨格を軟体性金属にすることでパフォーマンスが」

非常に楽しそうだが、やっぱりアルフには理解できなかった。そもそも書いてる本人にも理解できないよ（by 作者）

そのころ、我らが少佐殿こと高町なのははというと、晩御飯を終

え、宿題の国語と格闘していた。

「解せぬ！」

『なのは……』

《ガトー……》

ユーノとデラーズ・ハートが見守るなか、なのははボロボロになりながら宿題の問題という名の敵を次々と打ち倒していった。

そして、激闘の果てに完全に全ての敵を倒した。

「はあ、はあ、私の心は（以下略）」

『やったね！なのは』

《よくやったガトーよ。ところで、終わって早々だが貴公に伝言がある》

なのはが「なんと？」と返事をする、デラーズ・ハートは伝言を再生する。

《こんにちわ。私はテストロッサ家次女、フェイト・テストロッサだ。明日午前5時より貴方に決闘を申し込む。私が勝ったら、貴方の持つジュエルシードを全て貰う！覚悟しやがれ、今回の私はひと》

「貴様の話を聞く耳など持たぬ！」

なのはは伝言を強制終了し、消去した。

『でー！聞いてやれよ！』

「とにかく、明日の5時か。今日は早めに寝よう」

《……挑戦に、乗るのか？》

「はい。いくら子供とは言え（ユーノは心のなかで突っ込んだ）意気込みは買ってやりませんとな」

《貴公らしい答えよ》

そういったデラーズ・ハートになのはは返事しようとしたが、眠気がそれに勝り、ついあくびが出てしまった。

「申し訳ありません」

《構わぬ。今日はもう休め》

なのはは言葉に甘えることにした。

翌日 . . .

フェイト・テストロッサの指定した場所は海鳴の臨海公園だった。なのはとユーノは時間丁度に訪れる。すると、まだ灯ったままの街頭の上に金髪の少女がたっていた。

格好は以前と違い と言うより全然違う。黒以外バルディッシュの面影はない。完全にどこぞのフルバーニアンである。

紫だちたる雲に映える金髪は超野菜人を彷彿させた。

「貴様の言う通り来たぞ」

「ふん！この私に倒されにきたか。下級戦士め！」

ユーノは「この子キャラクターが定まっていな」！とその時考えた。

戦闘は自然な成り行きで始まった。

この高町なのはは O H A N A S H I する気など微塵もないのだ。

初めは海上でのビームライフルの撃ち合いとなった。

因みになのはは背中に魔法のロケットブースター（突っ込んだら負け）を取り付けているため空中戦もこなせる。

「ほお！？貴様、前より動きが良くなったな！」

なのはは純粹にフェイトを誉め称える。

「だが、まだ性能に頼っている！」

なのはの放ったビームはそのまま行けばフェイトに命中していたが、フェイトは背中中のフレキシブルブースター（勝手に命名）を駆使して見事に避けた。

「今日こそ決着を着ける！母さんのため！アルフのため！そして・・」

「なんだ！？」

「アリシアのため！」

フェイトはシールドを展開し、サーベルを抜いた。黄金色のビーム刃がまぶしい。

なのもナギナタを装着した。

そして、二人は一斉に間を詰め、ビームの刃を交差させた。

離れては交わり、離れては交わりを繰り返す二人の闘いはまるで美しい舞踏を見ているようだったとユーノは後に語っている。

私情を闘いに持ち込むか！確かに闘いは怨恨や私情から始まる。

だがそのみで闘いを支えるものに私は倒せぬ。私は義によって立つているからな！」

「ダニー!？」

言ってみたものの、今のなのはに“義”なるものは殆んどない。

二人はバシッと火花を散らせ、再び距離を取った。

そして、絶叫と共に一人は刃を振りかざす！

「又才才才才才才才才才才！！！」

「であああああああああああ！！！」

二人が激しくぶつかろうとした、その時……！

「ぶるあああ！まーちやーがれーい！」

えらくWAKAMOTO 口調な少年が二人の動きを間には言つて封じた。

「なんと!？」

「ダニー！？」

なのはとフェイトは呆気に取られる。

「時空管理局の執務官のお、クロノ・ハラウンだあ。テメーら剣をしーまーいやがーれーい」

「じ、時空管理局……！」

フェイトはクロノが時空管理局の人間、しかも執務官だと知ると  
回れ右して遁走し始めた。

「……！貴様！何処へ行く！？」

「ここは退かせて貰う！決着を着けるまで、お前を追い続けるからな！」

「んまあ、逃げた方はしょうがないかあ。よーしテーマ職質すつか

らきやがーれーい。そのフェレットモードーキーもだーよ」

なのは手に軽いバインドがかけられた。

「あ、それから、俺のことを『空気読めない』とかあ『若本病』とかあ『お前キヤロだろ？中のひと的な意味で』とか言ったら腹ア切らせッから覚悟しーやーがーれーよお」

続くの！

第七話 時空の管理局なの！（後書き）

さーて、次回のなのはちゃんはー？

ンンン、クロノ・ハラウンだぁ。次回はぁ、ンンなんだっけえ？

ダニイ！？

ン、フェイトかぁ。どうした、笑えよ、フェイト。

（嘲笑）

ンンンンンンンン！ぶるあああああ！

どっかーん。

## 第八話 アースラなの（前書き）

どうやら後に登場する人物の方が暴走が激しくなる傾向があるよう  
だ。

あと、オマケがあります。



## 第八話 アースラなの

次元航行艦『アーガマ』じゃなくて『アースラ』は新たな客人を迎えて次元空間に浮かんでいた。

「ンンン！オラ、テメー等、こっちきやがーれい」

なのはとユーノは今、そのアースラ艦内をえらく若本な少年に案内されながら歩いていった。

宇宙戦艦には乗ったことはあるが、次元航行艦などに乗ったことは勿論無い。なのはは少しでも情報を得るため目だけを動かして周りを観察している。

そんなとき、なのはの視界に1つの物体が現れた。

それは物語の中の王子様やお姫さまが結ばれる原因となる『一目惚れ』に似た症状としてなのはの心をガツチリ掴んで放さなかった。

「・・・？なのは、どうしたの？」

彼女の肩に乗っていたユーノは不審そうになのはに聞いた。

「ユーノ・・・」

「えっ？」

「あそこを見る」

ユーノはなのはの指差す方へ顔を向ける。

そこには大量の段ボールが積まれていた。

「あれが、どうかしたのかい？」

「私はあれに入りたい・・・」

「・・・ハッ？」

すると突如、なのはは興奮のあまり叫び始めた。毛細血管が切れたのか目が赤くなっている。

「何故かわからないが段ボールに私は強烈に惹かれている！あのかくばったボディ！地味なカーキ色！淡い色で書かれた商品名！そして、なんとも言えない独特のこの臭い！そのすべてが私の心を揺さぶっている！」

なのはは、突然の事態に驚きを隠せないユーノを他所にクロノへお願いする。

「ハラオウン執務官！この艦内にいる間、あの段ボールを被って移動してもよいだろうか！？」

「別に構わねーけどよ」

「感謝する！」

なのははあり得ない程の素早さで段ボールに飛び付いた。その勢いでユーノが床に放り出される。そこへクロノが、

「ン、そこのおフェレットオ。もう、いつもの姿に戻ってもいいんじゃないアねえーの？」

「あ、それも、そうだね」

ユーノがそう言うと、突然、ユーノのからだがなのはのセットアップよろしくフラッシュし、光が晴れるとそこにはなのはと同年代の少年が立っていた。

「なんだと！？」

なのはは（段ボールの中で）驚きの声をあげる。

「なのははこの姿見せるの二回目だよね？」

「いや、今回が初めてだ・・・」

「えっ？」

ユーノは動揺する。

「初めて僕とあったときこの姿じゃなかった？」

「その姿だったら君を動物病院につれていくかね」

言われてみればそうだ。ユーノなのははに謝った、が、なのはは段ボールの中のため、まるで段ボールに謝っているようだった。

「ここがア、リンディ提督のオ、部屋だあ」

クロノに案内され訪れた高級士官の部屋はまさしく「日本被れ」といった感じの内装で、日本にいて9年にもなるなのははにしてみれば突っ込みどころ満載であった。

「よくいらしてくれたわね。ええっと、ユーノさんと、なのはさん

「えっ？なんで段ボール？」

リンディを見たとき、ユーノは少し安心した。

リンディはこの若本擬きの実母だと言うので、また変なひとではないかと心配していたのだ。

「お茶でもいれましょうか」

どうやら職務質問を受ける身の自分達をもてなしてくれるようだ。

「あら？この茶筒、えらく固いわね・・・ンンン！」

リンディは掛け声と共に一気に力を加えた。

「セー！ックス！」

スポーーン！

「ふう。開いたわ」

「いやまってまってまってまって！」

あまりに自然な流れだったため、ユーノは突っ込むのを危うく忘れるところだった。

「何ですか今の掛け声！？」

「蓋も開いたし、今淹れるわね」

「ひとの話を聞けや！」

騒ぐユーノをさらりと無視してリンディはお茶 抹茶をたてる。

「セセセセセセセセセセセセセセセセセー！ックス！」

「・・・出来たわ。なのはさん、どうぞ」

なのはは段ボールから腕だけをズボツ！と突きだして抹茶を受け取った。

「・・・うまい！極上の仕上がりだ！」

「なにが『極上の仕上がりだ！』だよ！突っ込めよ！」

「ユーノオ、なーにを騒いでいーやーがーるー。提督の『セックス！』はア、別に性行為を意味するものではない。そういえば、昔俺の友人から聞いたジョークでよお、海外でえびザがなんか発行するときによお、性別を書けつて言う意味の『sex』の欄に、『週五回』テエ書いちゃったんだてさ。ぶるあああ。バーカだよねソイツ。週五回だってよ。やり過ぎだってヴァ。週休二日制かよって

いやまじで」

「知らねーよそんなこと！」

嗚呼なんということだろう！時空管理局に捕まるわ、ジュエルシード集めできないわ、執務官が若本だわ、んでその上司兼母親は精神崩壊してるわ・・・。

ユーノは次元世界の未来を憂えた。

続くの！

おまけ

機動六課に教導官がやって来た！

ティアナ「教導官って誰だろ？」

スバル「なのはさん張りのすごいひとじゃない？」

バニング「俺が新任のサウス・バニング一尉だ！」

新番組『魔法大尉リリカルバニング』

バニング「ランスター！ナカジマ！モンディアル！ルシエ！準備はいいか？俺にペイント弾を一発でも当てればお前らの勝ちだ！」

みんな「了解！」

開始10分後

パパパパパパ！（ペイント弾発射音）

エリキャラ「でーい！」

バニング「モンディアル！ルシエ！お前らは戦死だ！そこで反省してろ」

エリキャラ「はい（ノ、）…」

ティアナ「エリオとキャラがやられた？スバル！」

スバル「おう！」

更に10分後

パパパパ！

スバル「まーいー！」

バニング「ナカジマ！動きが単調すぎるぞ・・・ランスターか？」

ティアナ「でーい！」

パパパパパパパ！

全て避けるバニング。

バニング「無駄弾を撃つな！」

ティアナ「そんなこと言ってたてて（ノ）>」

バニング「無駄口もだ（、´）！」

なのはもびびる壮絶な訓練！

しかし、それにも成果が！

ティアナ「ロックオン・・・やった！」

バニング「フツ、素晴らしい連係プレーだ。上達したな」

スバル「バニング一尉のお陰です！」

エリキャロ「そうです！」

バニング「ははは！ありがとうございます」

平和に過ぎて行く日常。しかし、それに終わりが・・・。

変態「私はジェイル・スカリエッティ。UC ではブライトさんだがそんなことドーデモイイ。私はこの世をけちよんけちよんにしてやる」

繰り広げられる戦い。

その時、バニングは　。

バニング「ここは俺に任せて、お前らはゆりかごに突入しろ！」

シュゴー！（バニング突貫）

みんな「バニング一尉ー！」

そして、戦士は空を駆ける。

2012年、2月31日 公開！

## 第八話 アースラなの（後書き）

リンディさんについては後悔していない（- -;）。

だって精神崩壊シリーズが普通にようつべにあるんだもん。問題ないもん。

文句は聞かないもん。ほ、ほんとだもん！

アスカ「……………きもちわるい」

終劇



第九話 蒼く光る炎なの（前書き）

今回はややシリアスかな。ネタだけどさ。

## 第九話 蒼く光る炎なの

前回までのあらすじを効果音だけでどうぞ。

たっ たっ たっ、ざっ！がビーン。ガボツシュ、ピギヤアー、シュバツ、バキューンバキューンバギューン！ピギヤアー！どしーン。ファンファンファン……。ブーン、スズツ、たっ たっ たっ、ざっ！ばしゅん！バキューンバキューンバギューン！にやゝずしーン。ばしゅっ！バキューンバキューンバギューン！バツ！ざっ！ブーン、ききっ！カポーン……。ガバツ！たっ たっ たっ、ばしゅっ！バキューンバキューンバギューン！ざっ！モグモグ。カリカリ。たっ たっ たっ、ざっ！ばしゅっ！ブシュー、バキューンバギューンバギューン！バキューンバキューンバギューン！バギューンバギューン！バギューン！ヴウン！バシーン！バシーン！バシーン！ゴオオオオ！ぶるあああ！ガチャーン、てくてく。ゴソツ、ばしゅっ！てくてくウィーン、カシュー。

セー！ー！ックス！セー！ー！ックス！セセセセセセセー！ー！ックス！

以上。

のは……。なのは……。なのは！

「うお！？」

なのはは今学校にいた。そして、考え事をしていたのだ。それは、アースラを去る前にリンディに言われたこと。

『よかったら、私たちに協力してもらえないかしらセー！ー！ックス！』

物言いは優しくだったが、これは協力しない限りジュエルシード探しを違法行為としてしよっぴくぞ、という脅しでもある。

さて、どうするか、と深い深い思考の井戸の底で考え事をしてい  
たとき、アリサによって引き上げられたのだ。

「なのは、あんた、何か隠してたり悩んでたりしてるでしょ？」

流石はアリサ。なかなか鋭い。しかし、なのはも易々と喋るわけ  
にはいかなかった。と言うか、「私い、実は魔法少女なんですう  
とここで言ったところで信じてもらえる訳がない。」

「いや、私は何も隠したりしていない」

「嘘仰い！」

アリサの口調は一見なのはを責め立てているように見えるが、な  
のはは彼女の声色に自分のことを気遣ってくれている優しさがある  
ことを感じ取っていた。

「あんた最近ずっと暗くてさ！それでいて何もなし！？冗談じゃな  
いよ！」

それに一緒にいたすずかとはやても加わる。

「そうだよ、なんか、なのはちゃんらしくないよ！」

「なんかあったら、遠慮なんてせんで、うちに言ってくれればエ  
工のに」

なのはは自分を気遣ってくれる友達にすべてをうち明かしたいと  
いう衝動に駆られた。だが、それはいけない、と衝動を抑制してい  
た。

「・・・すまない、こればかりは、言えんだ・・・」

その瞬間、アリサの右手がなのはの左頬を打った。

「・・・ッ！」

その光景をすずかとはやては気まずそうに見ていたが、なのはは、  
自分は打たれて当然のことをしているのだ、と考えた。

そして、数日後。

「よく聞け、糞虫共！ここのクラスの高町なのはが家庭の事情で暫  
く欠席することになったが！それは別に奴がここから脱走したわけ  
ではない！」

担任の教師からその事を聞かされたとき、アリサは窓の外を眺めていた。

アースラ艦内の個室。

「なのは、どうしたんだい？」

ユーノ（人形態）は、髪をおろして窓の外を見やっっているのはに問いかけた。

「私は大切な友を裏切るようなことをした」

窓の外には暗くも、様々に変容する次元の海が延々と続いており、そこに映ったなのはの横顔は寂しげだった。

窓際に立て膝を立てて座る彼女は9歳とは思えない大人っぽさがあり、ユーノは不謹慎にもドキリとしてしまう。

ゴホン、と咳払いをして、

「友達は、あの子との決着をつけた後、いくらでも仲直り出来るさ」

なのははこちらを振り向いた。

髪をおろした顔も可愛いな、とユーノはまたも不謹慎なことを考え、ハツとした彼は思わず気を付けの姿勢をとってしまった。

「そうだな・・・」

なのはは何を思っつか微笑み、再び舷窓に顔を向けた。

「私はただ、駆け抜けるだけのことが・・・」

それを見て、ユーノは彼女になにもしてやれない自分の不甲斐なさを責めるのだった。

「フェイト、もしなんなら、母さんも一緒に行くけど・・・」

「いいよ、母さん。これは、私の問題だから」

フェイトは自分の役目はジュエルシードを集めることだと重々に理解している。だが、彼女は思うのだ。

「あいつを倒さない限り、私はジュエルシードを集めることは出来ない！」

あの少女を倒せないということは、私を産み出してくれた母さん

を、大切な姉のアリシアを、私に尽くしてくるアルフを、そして、私に魔法を授けてくれたリニスを裏切ることになる！

それが、今のフェイトの原動力だった。

「気を付けてね」

プレシアとアルフが見送るなか、フェイトは戦いの場へと赴くのだった。

「フェイト・テストロッサ、フルバーニアン、いきます！」

フェイトは転送ポートへ飛び込んだ。

アースラ艦橋

オペレーターのエイミイがクロノとリンディに報告した。

「T a t k d k p j d t d j m p g j d 2 7 p t j d j g a t w d  
p d p d t d j t t d」

「なんだとお。例の魔導師が、海鳴海上のジュエルシールドを、強制発動しようとしているうだつてえー？」

「A g t w」

「ンン、取り合えずう、なのはとユーノをここによーびーやーがーれえ」

クロノがそう命じてから丁度2分後、なのはとユーノは艦橋に到着した。

「二人とも、これを、見てえみる」

全周囲モニターの一部に映像が写し出される。映像の中では例の金髪少女がジュエルシールドの強制発動を行っていた。

「残酷かも知れないけど、ここはこのまま彼女の自滅を待つのが得策ね・・・なのはさん？」

なのはの耳にはリンディの声は伝わっていなかった。彼女は今、映像から金髪の意味を感じ取っているのだ。

これは別に『なのはニュータイプ宣言』ではない。武人として、映像の中の彼女が何を言わんとしているかが、ひしひしと伝わってくるのだ。

私を誘っているのか！

「セックス！？」

リンディが声をあげたが、これは別に彼女が欲求不満な訳ではない。なのはがいきなり艦橋を飛び出していったことに驚いているのだ。

クロノ達の声を背後に聞きながら、なのはは転送ポートへ飛び込んだ。

続く

## 第九話 蒼く光る炎なの（後書き）

眠たいなか書いたので、ひどい間違いがあればゴラア無目藻この野郎、と指摘してくださいな。あと感想とか。くれたら幸せになれる。僕が。

## 第十話 激突戦域なの（前書き）

ノーコメント！



## 第十話 激突戦域なの

海鳴市 臨海公園近海、早朝。

フェイトはジュエルシードの強制発動を続けていた。

『まだ、来ない!?』

ここで相手が誘いに乗らないと自分はこのまま自滅してしまう。

そのようなことを今更ながらに心配し始めた時、バルディッシュ（フルバーニアン）が警告を出した。

《c a u t i o n ! 直上です》

「ッ!？」

警告のほんの数コンマ秒後にフェイトをビームが襲った。それを危なげ無くかわす。

フェイトはとっさにビームの飛来した方向を向いた。

やっぱり来たな!

フェイトの目には急降下爆撃機よろしく降下しているなのはの姿があった。

「沈めえー!」

なのはの叫びと共に再び数発のビームを撃たれる。

「くっ!」

なのはの射撃は正確である。フェイトは弾道を予測しながらバーニアをふかさなければならなかった。

フェイトがタイミングを計りサーベルを抜く。

「ん? 格闘戦か。だが、私の勝ち戦に花を添えるだけだ」

なのはもナギナタに持ちかえる。

以前のように、二人は一旦距離を置いた。

まるで、その時だけ時間が止まったかのようであった。

一瞬でその世界を波のざわめきだけが支配し、その支配はやはり一瞬で終わりを告げる。

「むおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!」



これは流石のなのはも驚いた。以前戦ったときよりも格段に強くなっている！

「決着を着けるまで、お前を追い続ける！」

「貴様と話す舌などもたあん！」

白熱する闘い。しかし、そこへ、気を取り直したユーノが空気を読まずに介入する。

「二人とも、ほんとにマジでいい加減にす」

「余所者は引っ込んでろ！」

さすがに堪忍袋の緒が切れた二人は同時にアクセルシューターをユーノへと放った。何だかんだ言って二人とも息ピッタリだ。

ユーノは「ゴメーン！」と叫びながら得意の防御をすることも出来ず全てもろに喰らい、青い海へ堕ちていった。

闘いを余所者に邪魔された二人は仕切り直しとでも言うようにまたも距離を取った。

『これは、私も無傷ではすまん』

なのはは直感的にそう思った。

二人は各々の剣を構える。

そして、また、絶叫。

「ああああああああ！」

なのははナギナタを横に払った。

「！」

フェイトは生まれた隙を突く！

「これでダウンだ！」

手首の向きを変え、黄金色に輝くビームサーベルを振り下ろした！それをなのはは避けもせず 正確には避けたが 受ける、かにみえた。

「アッ！？」

フェイトは小さく呻いた。

フェイトの振り下ろしたサーベルがなのはの肩を裂き、血を拭き出させていたのだ。

その瞬間、フェイトの頭はフリーズした。

覚悟はあった。あった筈なのに、こう相手を傷つけると言う行為がこれほどまでに辛いことだとは思っても見なかった。

肩に走った痛みは相当なものであった。しかし、なのはは言う。

「このようなもの、今までに味わった屈辱に比べれば！」

なのははナギナタの半分を消し、サーベル状にして逆手に持ち直した。

「肉を切らせて骨を断つ！」

ナギナタは正確に、フェイトの背部のフレキシブルブースターを貫いた！

「！？しまった！」

不意を突かれたフェイトは焦る。

彼女は方翼の故障した飛行機のようにフラフラとバランスを崩し始めた。

「このままではッ！？ダニイ？バインドだとお！？」

しかもいつのまにか四肢をバインドで拘束されていた。

これは不味い。嫌な予感しかない。

恐る恐る上を見る。

そこには予想通りなのはがいて、こちらを鋭い目で見ていた。

なのはの格好は先程とは違い、禍々しさが全力全快である。

両肩には大型ブースターが装着され、左手には巨大なシールド（冷却機付き）が装備されている。

「待ちに待った時が来たのだ」

なのははシールドの裏に装備されているこれまた禍々しい筒状の物体を取り出した。そして、それを右肩のブースター横にある機関部に装着した。

それは間違いなくアトミック・バズーカであった。

「再びジオンの理想を掲げるために！星の屑成就のために！ソロモンよ、私は帰ってきたアアアアア！」（注、これは呪文です）

長いバズーカの砲口に魔力がこれでもかと蓄えられる。

「スターダストオオオ・ブレイカアアアア！」

次の瞬間、砲口から閃光が放たれた！

「これが、星の屑かあああ！」

そして、その閃光はフェイトの華奢な身体を飲み込み（一応防御したけど、役に立つはずないじゃん）、そのまま海に突き刺さって巨大な水柱を立てる。

どうでもいいことだが、このとき、ユーノも巻き込まれた。

「ぶるああ！なんつうーバカ魔力なんだーよ」

クロノの声はやや震えていた。

「Tmd-wpjgvt dtvv.ktknm gwmhjav@@@」

「あの野菜王子擬きがぁ、生きてるかどーかってえ？ぶるあだいじょーぶだよ、そこら辺はわかってるってば。多分」

なのはのスターダストオオオ・ブレイカアアア！による爆発は海鳴市では地震と観測された。

震度は1〜2と大きくは無かった。が、敏感な人はこの程度の揺れでも目が覚める。

「・・・地震？」

彼女　八神はやてもそうだった。

実のところ、目が覚めた原因は地震による揺れではなかったのだが、まだなにも知らない彼女はそうだと片付けて再び眠りについた。だから彼女は本棚にある一冊の本がぼんやりと光を放っていることに気がつかなかった。

続く

## 第十話 激突戦域なの（後書き）

最後のはあまり気にしないでいいぜよ。

無印最終話

P l e a s e   c a l l   m e   b y   a   n a m e

(前書き)

これを最終話にしたかったのでかなり無理矢理詰め込みました。  
少し駄文かも。

あと、サブタイと内容は微妙に違います。





「うゝん提督う、その発言は、誤解を招きまゝすつてば」

アースラ艦内は騒然としていた。時の庭園は常識破りなほど大きいのだ。

「武装中隊出撃準備をとれぶるああ。任務は、あのボトル旗艦もどきの中にいるオヴァハンのたゝいゝほゝだあ。奴はネズミの分際で、人間の言葉らしきものを、ぺらぺらと喋りたてるが、耳を貸す必要はない」

ガンダムでいうところのジムやボール（つまり、やられやく）に相当する武装局員達が勇ましく転送ポートに飛び込んで行く。

転送ポートは、限られてはくるが、基本的に何処へでも行けるとっても便利な機械である。

武装局員達は一瞬で時の庭園内部へと送り込まれる。

「プレシア・テストロツサ！あなたを逮捕し・・・うわああ！？」

局員達が驚いたのも無理はない。

そこには超巨大な『サク』（トニーたけざきのガンダム漫画に登場するザクの量産型MS）が堂々と存在していたのだ。

「オホホホ！このビッグ・サク量産の暁には管理局などあつという間に叩いてくれるわ！」

サクはカプセル状の身体から生えた腕というか触手をうねうねさせる。

「うわっ！気持ち悪！」

「喰らえ、サクマシンガン」

サクが右手に持っている小さなマシンガンのもの銃口から「ペペペペペ」と弾が発射され、武装局員達に襲いかかった。

「いたたたたた！地味に痛い！」

どの程度の痛さかというと、輪ゴム鉄砲の弾幕をうける、と言えはわかるだろう。

アースラ艦橋

「セックス！（ガッデム！的な意味で）何て圧倒的なの！？」

「圧倒的！？あれがすか！？」

ユーノは松葉杖をつきながらも健気に突っ込む。

「しかし、厄介なものには間違いあるまい」

「あら、なのはちゃん。あの子の調子はどう？」

なのはは丁度、フェイトを医務室につれていったところなのだ。

「精神的負荷が大きいようです。あの母親のせいかもしれません」

「間違いなくなのはのせいだよ。それよりなのは、左肩は大丈夫？」

「左腕が上にあげれんが、問題はない」

なのはは少しだけ腕をあげる。

《ガトーよ、本当に行くのか？》

デラーズ・ハートが心配そうに声をかけた。

「協力すると決めたのは私ですから。ここはしっかりと責任を取りませんと」

なのはは不敵に微笑んだ。

「フェイト、フェイト！」

「ハッ！？」

気が付くと、フェイトは医務室らしき部屋の隅で埋まっていた。

「・・・アルフ」

「フェイト、早くここを出ようよ！」

アルフは主の危機と感じて駆けつけてくれたのだ。

だが、フェイトはプレシアの手伝いをすることに疑問を抱き始めていた。

それは別に、反抗期、とかではなく、フェイトの姉、アリシアに縛られている彼女が哀れに思えてきたのだ。

アリシアは数年前に事故で死んだ。全くそれは不幸な事故であった。

悲しみに暮れるプレシアはその時、違法であった人造魔導師を産み出す。死んだ愛娘、アリシアの代償として。

しかし、プレシアはフェイトをアリシアの代わりではなく、フェ

イトという存在として可愛がった。

その事もあるのだろうか、アリシアとフェイトを同一視しなかったプレシアはアリシアを忘れることができなかった。

その果てに彼女はジュエルシードに手をだし、アリシアをこの世に蘇生させるため失われた都、アルハザードを夢想するようになる。アリシアの記憶を引き継いで産まれたフェイトは、確かにアリシアに生き返ってほしいと思うし、プレシアの喜ぶ顔も見たい。そう思っていた。

だが、それはあの少女　高町なのはに会うまでだった。

確かに、あの子は変なやつではあるが、今と未来を見つめるあのまっすぐな瞳はフェイト自身に大きな影響を与えた。

「行くぞ、アルフ」

フェイトは決心したように立ち上がった。

「プレシアを助けに？」

アルフの問いにフェイトは小さく頷く。

「そう、母さんを、そして高町なのはを、助けに　」

なのははビッグ・サクと対峙していた。

ユーノ（松葉杖装備型）とクロノは別のエリアでプレシアの召喚したお人形さん達と戦っている。

見た目だけでいうなら確実にお人形の方が強そうなのだが、このサク、意外と強いのだ。

主兵装のサクマシンガンは輪ゴム鉄砲程度の威力しかないのだが、質量に身を任せた攻撃が厄介だった。

サクが腕を収納してこちらへ転がってくる。

「秘技、サク大　回　転！」

完全なカプセル状態で回転する様ははつきり言って間抜けそのものであるのだが、踏み潰されれば一貫の終わりである。

なのはは魔法のロケットブースターで跳んだ。

ちなみに今はサイサリスモードではない。あれは魔力消費が激し

いのだ。

「くっ！意外とやるな」

サクマシンガンをシールドで防ぎながら言った。

MS戦闘の基礎として、相手を無力化する方法は頭を狙うかコックピットを狙うか、である。

なのはは、その両方を試そうとしたのだが、どういつわけか、グイングイン伸び、動き回る腕にそれを阻止されてしまう。

どうする？なのはは考えた。

そして、動き回る腕を見て、あることを思い付く。

「閣下」

《どうした、ガトーよ》

なのははデラース・ハートに考えたことを話した。

「サポートしてもらえますでしょうか？」

《良いだろう。よし、行け！ガトー！》

「ハッ！」

なのははサクに向かって突っ込んでいった。

「・・・！？なんだ？」

プレシアは相手の気でも狂ったかと思い、サクの伸縮自在の腕を伸ばした。

このままいけばなのはと腕は衝突し、質量的に勝る腕がなのはを吹き飛ばすだろう。

しかし。

「又オオ！」

「何！？」

なんと、なのははその腕をスレスレで避け、あるうことかサクの腕の上を走り出したのである。

勢いよく伸ばした腕はそう簡単には戻らない。

なのははサクの肩の部分まで一気に駆け上がり、跳んだ。

なのはの正面に、サクの赤いモノアイがくる。そこにビームライフルの銃口を向けた。

「沈め！」

ビームライフルの銃口が輝きを放つ。すると、サクのモノアイが吹き飛んだ。

「そんな！メインカメラが！？」

何処ぞのニュータイプならメインカメラを「たかが」呼ばわりできたが、生憎プレシアはニュータイプではない。

メインカメラを壊されたサクはいろんな連鎖反応によりバランスを崩して、崩れ落ちた。

「ムムム・・・」

プレシアはコックピットを強制解放させて外へと這い出した。向こうを見ると、なのはがライフルをこちらへと向けている。

「降伏せよ。しからざれば攻撃する」

脅してはいないようだ。プレシアはこっそり掌に魔力を集束させようとした。が、その時。

「待ちやがれ！」

空間の入り口の方から声がした。

「フェイト・・・」

「母さん、もうやめるんだ！」

プレシアはフェイトのいつていることの意味が分からなかった。

「どうして？だってフェイト、アリシアは」

「母さん！なんでそう過去に縛られるんだ！」

「母さんは、フェイトとアリシアと暮らしたいのよ！」

完全になのはは蚊帳の外だが、ここで割ってはいるのもアレだと思ひ、ここは静観することにした。フェレットとは違うのだよ。

「アリシアは、もう死んだんだ。一度死んだ人は、帰ってこない。

私達は過去にこだわらず、今を生きていけばいいんだ」

「でも・・・母さん、アリシアのことが、忘れられないのよ・・・」

プレシアの目には涙が浮かんでいた。

「母さん！！」

フェイトが叫ぶ。プレシアは反射的にフェイトの方を見た。

「私は、母さんにアリシアのことを忘れてほしいんじゃない。母さんはこだわりすぎてんだよ」

フェイトは腕を拡げて言った。

「今、ここにアリシアはいない。でも、あなたにはまだ私がいる！フェイト・テストロツサがいる！それじゃダメか！？」

少し離れてみていたなのはにも、フェイトがとても大きく見えた。プレシアはよろよろと立ち上がり、フェイトのもとへ駆けよって自分の3分の2程の背丈しかない娘の胸でおいおいと泣いた。

「ぶるああ、良い話だなあ」

「ン？なんだ、クロノにユーノ。いたのか」

「今ついたとき。でも、どうやら終わったようだね」

二人とも軽い感じで言っているが、クロノは頭から血を流し、ユーノの松葉杖も敵を叩きまくったためかボロボロだった。てかどんだけ丈夫なんだよ。

「そろそろ結界も消える。次元空間に戻ろう」

クロノが言うにはこの海域一帯に結界が張られているらしい。どうりで自衛隊が出てこないわけだ。

とにもかくにも、これで一つの騒動が解決した。明後日からでも、学校へ行こう。

なのは達に、日常が戻った。

まず、なのははアリサ、すずか、はやての三人にこれまでのことを詫びた。初め、アリサはツンとしていたが、なのはが誠心誠意をこめて謝り続けると、

「ダー！わかったわよ！許してあげるわよ」と許してくれた。

ユーノは、取り合えずミッドチルダへ行つて族長に今回の顛末を報告したいと言ったが、ミッドチルダへの航路が安定していないことが分かり、また高町家に居候することとなった。

「ごめんね、なのは。また迷惑かけるけど・・・」

「気にするな。この世の中は義理と人情で回っている」

そして、

テストロッサ一家は　。

「なのは、なのは」

「なんだ、ユーノ。今私は宿題中だ」

「あのさ、あの親子の判決が出たって！」

「なのははペンの動きを止めた。「どうだった？」

ユーノが言うにはあの親子には一時的な監察期間がつくものの、具体的な処罰はないらしい。理由は、公務の妨害はしたものの、これといった重大な犯罪は犯していないから、らしい。

人造魔導師の件は不問とされた。

「フム、弁護したクロノが優秀なのか、管理局がゆるゆるなのか・・・」

「取り合えず、良かったじゃないか」

ユーノがそう言うと、デラーズ・ハートがボイスレターを受信した。

《ガトーよ、例のフェイトとやらからだ》

デラーズ・ハートはそれを再生する。

《先日の件について礼を言いたいから土曜の10時、臨海公園に来やがれ！勘違いするな。私は　》

「貴様の話など聞く耳を持たん！」

「なのははいつかのように再生を止めるとそれを消去した。」

「だから聞いてやれってばー！」

「続きは土曜に聞けばよい。私は寝る」

「なのははそう言い残すと、床についた。」

土曜日

その日は快晴で、臨海公園の空にはカモメが悠々と舞っていた。  
なのはが公園に着くと、そこには既に海を眺めるフェイトの姿があった。

「なんだ、もう来ていたのか」と、なのはが言う。

「呼び出しておいて遅れるわけにはいかないだろう?」

なのははフェイトの横について海を眺める。

その海は二人が死闘を繰り広げたことが嘘のように静かだった。

「・・・この前は、色々ごめん」

「なに、謝ることはない」

ふと横を見ると、フェイトがうつむき、モジモジしながら何かを言っていた。

「なんだ?」

「その、まあ、なんだ。ありがとう。高町さん」

「なのはで構わん。呼び捨てでもな」

フェイトが「えっ?」となのはを見ると、ニヤリと笑っていた。

「え、じゃあ、なのは」

「なんだ?」

「この前は、その、ありがとう。感謝している」

なのはは身体をフェイトの方へと向ける。

「構うことはない。これから母親を大事にしろよ」

「は、はい!」

ユーノならいつもここで突っ込むのだが、そう言うなのはは今日  
は妙に様になっていた。

「それに、お前は私にまだ一度も勝っていない」

フェイトは恥ずかしいのか、ムツとしたのか、顔を赤くして、

「いつかお前を倒してやる!覚悟しやがれ!」

と言い放った。

「フム、そうか・・・」

すると、なのははいきなりフェイトの襟首を掴み、ぐいと引き寄せた。



フェイトさん驚いてます。

「確か、フェイト・テストロッサとかいったな」

いまさら！？と思いつつフェイトは「そうだが！？」と答える。

「二度と忘れん・・・！」

そう言つと、なのははフェイトを突き放し、右手を差し出した。

フェイトも一呼吸間をあけて、右手を差し出す。

こうして、ここにライバル、戦友、そして竹馬の友という関係が二人の間に結ばれたのだった。

アアッ、なんて漢らしい！！

完

無印最終話

P l e a s e   c a l l   m e   b y   a   n a m e

（後書き）

予想以上に長くなりましたわ。

何はともあれ無印終了です。次はA Sですね。

ありがとうございました。

## 第一話 プロローグなのセカンド（前書き）

A S 編始まるぜつ、て初っぱなから暴走気味。

## 第一話 プロローグなのセカンド

日曜日、八神家。

時計を見ると午後10時を回ったところだった。

八神はやての日課は寝る前の読書である。

彼女は車椅子を操り、本棚へ行き、閃光のハサウェイ（下）を取り出し、布団に入った。

枕元の証明をつけ、ページを開き、読み始める。

・・・ふと気が付くと時刻は10時半を回っていた。

今日も孤独な一日だった。彼女にとって休日は苦痛だった。

「・・・」

思わず涙がこぼれる。両親に先立たれ、長らく独りぼっちの彼女は家族を欲していた。

そして、

神はこの願いを、  
聞いてくれた。

枕元の電灯を消そうとしたとき、自分の背中、つまり本棚に存在しないはずの光源を感じた。

恐る恐る、振り向く。

するとどうだろう。本棚にある一冊の本　古い、鎖で固められた本　が光を放っているではないか。

はやては首だけでなく身体もそちらの方へと向けた。

目の前で超常現象が起きているにも関わらず、彼女は驚きの他に、安堵に似たような感情を抱いていた。

しかし、ある程度冷静でいられたのもここまでである。

バシーン！

突然本を固定していた鎖が弾け飛び、独りでに浮遊して、ページをめくり始めたのである。

それと同時に、その本の下に幾つかの人影が姿を現した。

そして、本が光ることを止めたとき、その人影は順に名乗りをあげていった。

「ヒヤッハー！アタシ、ガリアンソード使いのシグナム！一応守護騎士のリーダー的な！？よろ乳首ー！」

「私ハ機械人間、シャマル、デス。ディボディボディボ」

「私、ヴィータと申します。ゲートボールの騎士でございます。よろしくお願いいたします」

「私はザフィーラ。ザフィ様とでも呼んでくれたまえ」

「・・・ブロリー、デス」

名乗りをあげた五人は相手の返事を待たずに話を進めた。

「ヒヤッハー。では、この契約書にサインを」

「！シグナム殿！」

その時、ベッドに寝転んだままのはやてを調べていたヴィータが声をあげた。

「この子、気絶しております」

「ヘアッ!？」

残りの四人があわててはやてに駆け寄る。確かに、目をぐるぐる回していた。

「ナンテコトデショー、ディボディボディボ」

「シャマル君、うるさいぞ」

ザフィ様は目をチカチカさせながら喋るシャマルを注意する。

と、ここでブロリーが、はやてを見て、

「なんなんだあこいつはあ？カワイイ！食べたいーデス」

ヴィータが驚きの声をあげる。

「貴殿はロリコンだったのか!？」

「はい。ヴィータちゃんも、ロリ！ですけどなんか違います」

見た目ロリなヴィータは微妙な感情を抱きながら曖昧な返事を返す。

「しかし、ブロリー。このお方は貴殿の主に当たるのだから食べた

い、等と言わぬように」

「できぬう！」（バヒュン！）

ヴィータに己の野望を潰されかけたブロリーはいきなり伝説化した。

黒々としていた髪は黄金に逆立ち、体からはオーラのものが溢れている。歩くときなんか「ガピユツ」とか音がする。

「貴様にその気がないのならこの娘を（表記不能）するまでだあ」

「やめろ、ブロリー！落ち着けえ！」

ザフィ様の制止も聞かず、ブロリーは宣言通り（表記不能）しようとしはじめた。

だが、その時！

はやてが目をさましたのだ。

さましたのだ、が。

彼女が目を開けると目の前視界一杯にゴツいお兄さんの顔面が広がっていたため、またも意識を手放してしまった。

これが、八神はやてと守護騎士達の出会いである。

## 第一話 プロローグなのセカンド（後書き）

プロリーの話し方はm a dをイメージしてください。  
なのはさん達の登場と守護騎士達の説明は次回です。

あと、ザフィーラのキャラもネタなんですが、なんのネタか分かりにくいですねえ。少なくともパラガスではないです。そんな感じの台詞がありますが、親父いではないです。

## 第二話 タイトルが思い付かなかったの（前書き）

ほんと、タイトルが思い付かなかったんですよ。  
あと、少佐があまり目立ってないな〜今回。



## 第二話 タイトルが思い付かなかったの

聖祥大付属小学校

セカンド

教室にハートマン？世先生の声が響いていた。

「よく聞け糞虫ども！今日からまた一人糞虫が増える。下等なもの同士仲良くしろよ」

「フェイト・テストロッサだ」

クラスメートからパチパチと歓迎の拍手が沸き上がる。なのはも、歓迎した。

なぜ、フェイトがこの学校へやって来たのか。

それは、数週間前に遡る。

『学校？』

フェイトとプレシアの声が見事にハモった。

海鳴市の中心部にあるマンションに居を構えることとなった二人に訪問したリンディが、学校へ行かないかセックス！と提案したのである。

「学校ね。でも、フェイトには前にリニスが基本教育を施してくれてたからね」

「すごい、英才教育ですね。で、そのリニスさんはどちらに・・・」  
リンディがそう問いかけると、プレシアとフェイトの顔に陰りが

出た。

「リニスは、私の使い魔だったんですが・・・」

しまった！とリンディは思った。そういうことは、よくあることなのだ。

「すみませックス・・・」

「謝る気無いだろ。まあ、それは置いて、私はとにかく、フェイトに聞いてみないことにはなんとも」

プレシアは隣でボケツとしているフェイトに聞いてみた。

「私は別に行きたくなど無いぞ」

「そう。リンディさん、この子、学校行くそうです」

「ダニイ!？」

フェイトの驚きの声が室内に充満する。

「フェイト、母さんに強がりを通じないわよ。本当は行きたいのでしょう?」

「かかか勘違いするな」

どうやら凶星だったらしい。

こうして、ツンデレフェイトはなのは達の学友となるのだった。

ハートマン? 世先生の朝のホームルームが終わり、子供たちは授業までの五分間、フェイトの回りに群がった。

「フェイトちゃんってどこ生まれ? 日本語うまいね!」

「ド、ドドドイツ?」

「なぜ疑問形?」

そのような光景を遠目に眺めていたなのははそれを「フッ、子供は元気が良いな」と評価し、アリサに「なのはも子供だろ」と突っ込まれていた。

一限目は英語である。

ゆとり教育が終わり、小学校でも英語教育が本格的に始まったからである。

「テストロッサ君、君は帰国子女だから英語は余裕のはずだね?」

英語担当のラコック先生は優秀な嫌われものである。

周りからは小さく「ラコックに目付けられたか」と聞こえてくる。帰国子女だから英語に強いとは限らないのだ。

「私が言った日本語を英語に直しなさい。『私の顔に赤いものを付けましたね』」

ラコックは答えられないとおもっていたが、フェイトはすくつと立ち上がり、答えた。

The red thing was attached to

my face」

周りからおおつと感心の声が聞こえてくる。  
ラコックは少し眉を潜めた。

「では、次。『この寄生虫めが!』」

「You are parasite!」

「『寄生虫!』」

「Parasite!」

「『寄生虫!』」

「Parasite!」

その瞬間、チャイムの音が鳴り響いた。

「あのラコックを打ち負かすとはな。中々出来るものではないぞ」

「ふん!私に任せればどうということはない」

その日の昼休み、なのは達は同級生の質問攻め地獄からようやく解放されたフエイトと屋上で話していた。

「そつだ、お前にはまだ紹介していなかったな」

なのはは弁当を食べる箸を置いて友人の紹介をはじめた。

「此方はアリサ・バニングスと月村すずか。二人とも、私の友人だ<sup>戦友</sup>」  
「オイ」

アリサがさりげなく突っ込んだが、なのははそれを完全に無視して「本来なら、もう一人いるのだが、生憎、今は病院のベッドだ」と説明を続ける。

「はやてちゃん、大丈夫かな?」

「大丈夫だ。あいつはそう簡単にくたばりはせん」

はやてはいつそのことくたばってしまったかかった。

自分は昨晚(昨晚、ということは今更けは明けている)、変な集団が突如自分の部屋に出現したことに驚いて気絶してしまった。

夢であつてほしいと切に願った。しかし、目が覚めると自分は病院にいて、その変な集団が同じ病室にいたのだ。

「目を、醒まされましたか」

集団の中の一人、えらく礼儀正しいロリ娘（はやての言えたことじゃない）が口を開く。

「ン・・・誰？」

「あたしら、ヴォルケンリッターって言うの！よろ乳首！」

次はピンク髪の見た目によらずおちゃらけた感じの女性が謎のダンスを披露しながら言った。

ヴォルケンリッター、リッターということは騎士かな？ローゼン・リッターの親戚かしらん。

ヴォルケンリッターの面子はロリ娘とバカの他にキザな男、ロボット？そして昨晚の危ないお兄さんという個性的すぎるものであった。

「回診の時間ですよ」

そこへ、主治医の石田先生が入ってきた。

「具合はどうかしら？」

「お陰様で。ありがとうございます」

「でも、退院は明日ね・・・ところで」

突然、石田先生がはやてに耳打ちしてきた。

「あの人たちは、誰？」

先生のいうあの人たち、とは恐らくヴォルケンリッターの面々のことであろう。

「貴方を病院まで運んでくれた人たちだから、いい人だとは思っただけど・・・」

先生があやしがるのも無理はない。ここまで触れなかったが、五人は中世の奴隷服みたいのを着込んでいるのだ。

おまけに、例の危ないお兄さんがボソッと

「大人の女に興味は無いです」

なんて言い出すもんだから、石田先生は

「ヤヴァインじゃないこの人等！？」

とパニックになった。

このままでは先生に国家権力を召喚されてしまう。はやては不思議なことにヴォルケン達を守りたいと思った。

「先生！」

はやてがいきなり声をあげたことに先生は驚く。

「な、何？」

「じじ実ですね、この人等私の親戚なんですよ。イヤー、コスプレとかが好きでな、私を励ますためにわざわざ来てくれたんや！さーて今日はさっさと帰ってもてなしの準備せな！」

「ちょ、待ちなさい！貴方まだ万全では」

「ダイジョーブです石田先生エエ！」

はやては左腕に繋がっていた栄養点滴をぶちつと引き抜いた。血がピュー、と出る。

「ほらあ！ダイジョーブうう」

「ギャー！誰か、ガーゼガーゼ！」

その後、はやての奮闘（？）もあり、その日の内の退院が叶って、石田先生に国家権力を召喚されることもなかった。

## 第二話 タイトルが思い付かなかったの（後書き）

前も書きましたがこの話は原作に忠実ではありません。  
それはさておき、ダグラムってマイナーじゃないよね？

第三話 結局前回はプロローグみたいなものだったの。今回から本編なの。言い

タイトルどーり。ごめんなさい。

### 第三話 結局前日もプロローグみたいなものだったの。今回から本編なの。言

早朝の冷たい霧の立ち込めた公園に一人の少女と一匹の姪獣がいた。

「訂正しろ作者ああ！」

「ユーノ、何を騒いでいる」

喚くユーノを尻目になのははデラーズ・ハートを起動させた。赤い宝石はどういう原理か知らないが、ゲルググの標準兵装であるビームライフルに変形する。

「では、閣下。よろしくお願いいたします」

《うむ》

ビームライフルのスコープ（センサーみたいなのは実はデラーズ閣下なのだ）が点滅すると、なのはの半径十数メートルの位置に無秩序に光の珠が現れた。

「それじゃ、よいい・・・始め！」

ユーノの掛け声となのはが駆け出したのはほぼ同時だった。

先に展開した光の珠は仮想敵である。

なのははさすがに毎朝だと体力的に持たないため、休みの日の朝、これを相手にトレーニングに励んでいるのだ。

光の珠は落とされまいと広い公園を縦横無尽に飛び回る。

直接狙って当たるものではない。光の珠よりやや前方の空間を狙うのだ。

なのはの放ったビームが光の珠を貫く。

「ひとつ！」

これまでのところ、文章であるためにあまり違和感を感じていない方がほとんどであろう。

「ふたつ！」

しかし、よく考えてほしい。

「みつつ！」



ツインテールの可愛い少女が

「よつつ！」

普段着にライフルという謎の出で立ちで謎の光の珠を圧倒しているのだ。

「いつつ！」

シュールにも程がある。

「凄いよなのは！新記録だ」

ユーノの言う新記録、とは全て撃墜するのにかかった時間のことである。

「ユーノ、この程度で凄いと言っていては腐った連邦ですら倒すことはできんぞ」

「よくわかんないけど解ったことにしておくよ」

なのははユーノを肩にのせると駆け足で家路についた。  
もうすぐ朝御飯の時間である。

その日の夜・・・。

海鳴市の中心部は夜でも明るい場所であつたが、そこから少し離れると薄暗い裏路地へ入る。

そこを一人の青年が歩いていてた。

彼は管理局員である。

この数日、「例のモノ」の調査をしていた局員がここ一帯で襲撃を受けているのだ。

局員の青年は緊張の糸を張り巡らしながら歩みを進める。

と、その時。

「なんなんだお前はア」

局員は慌てて後ろを向いた。そこには大柄の優男風の青年が眠たげな目をして立っていた。

（バカな！？いつの間に！？）

この男、どうやら魔導師らしい。大きな魔力をびしびし感じる。

震える身体を慰めながら局員は厳しい口調で問いかけた。

「何者だ。名を名乗れ！」

「ブロリー、デス」

胸にある金属器 恐らくデバイス も点滅しながら

《パラガスでございます》

と自己紹介した。

「と、取り合えず、君たちに聞きたいことがある。同行したまえ」

局員はありったけの勇気を絞り出して言い放った。しかし。

「いやデス」

「は？」

「お前、ロリコン、かあ？」

「えっ、あっ！いや・・・違う！」

局員がブロリーの問いに答えるとブロリーはあらぬ方向を向いて暫く考えた後、再び局員に顔を向けて言った。

「貴様をデーン！してやる」

「えっ・・・？」

《いいぞ、今のお前のパワーでこいつをデーン！してしまえ！》

「ちょ、デーン！ってなんだ・・・オイ！」

「へあっ！」

突然、ブロリーの掌から緑色の気功弾が放たれ、局員の身体を吹き飛ばし、壁に叩き付けた。

デーン！

局員はそのまま気絶する。

「所詮、クズはクズなのだあ」

「ブロリー」

ブロリーが後ろを振り向くと赤い騎士甲冑 はやてがデザインしたものだ を身に纏ったヴィータが脇に本を携えて地上から数メートルの地点に音をたてずふわふわと浮かんでいた。

ヴィータは伸びている局員を一瞥して「早く回収いたしましょう」と本を開いた。

本は独りでに浮遊し、ページをばらばらとめくる。

すると、局員の胸から眩しく輝く光がポツと現れ、その本に吸い込まれていった。

「フム、やはりこの程度の魔導師では殆ど足しになりませんな」

ヴィータが少し失望したかのように言う。

「所詮、クズは（略）」

不満足ながらも目的を果たした二人は闇の中へ溶けていった。

「どうしたの、はやて？」

昼休み、いきなりアリサがそう言った。

「へっ？何が？」

「なんか、浮き足立ってるカンジ？」

アリサの言葉になのはも同意する。

「その通りだ。事実、3ミリほど浮いている」

「私はドラ○もんか。いや、別にそんなことあらへんけどなあ」

「何か悩みがあるならこのスーパーエリートフェイトさんが聞いてやるぜ！」

言えるはずがない。

『夜中に突然変な人が現れて家族になりました』

なんて言ったら変人扱いされる。

特に明らかな変人にまで変人呼ばわりされてしまう。

「ほんま、ほんまになんもないんよ」

そう言っではぐらかすしかなかった。

友人に真実を打ち明けられないことは、苦しいものである。

続く

第三話 結局前日もプロローグみたいなものだったの。今回から本編なの。言い

よう。

#### 第四話 激突都市なの 前編（前書き）

明けまして、おめでと〜ございます。

#### 第四話 激突都市なの 前編

高町なのはは夜の海鳴の空を駆けていた。  
その顔つきは真剣そのものである。

話は、数時間前に遡る。

「魔力反応ですと？」

なのははデラーズ・ハートからの知らせに首をかしげた。

《うむ。恐らく、最近リンディ殿から聞いている魔導師狩りの犯人であろう。貴公のことを呼んでいるようにも感じる》

魔導師狩りの詳しい事情は「機密」と言うことで知らされていない。

囑託魔導師という立場上、そういった情報は教えてもらいたいのであるが……。

《詳しいことが知らされない、ということはこの誘いに乗る必要もない。どうする、ガトーよ》

デラーズの問いかけはなのはを試しているようにも聞こえる。そして、なのはのそれに対する返事は、

「このような挑戦に乗らないのは、戦士として恥ですな。別に、戦つてはいけないなどという決まりもありません」

《それでこそ真の武士もののふよ》

そうと決まれば早速行動に移す。

幸い、現在の服装は普段着である。街へ行っても大丈夫だ。

彼女は窓を静かに開けると、庭へ飛び降り、音を立てずに着地した。

スカートがかなり際どかったが、気にしない。

『閣下、段ボール箱のようなものはありませんか？』

《いや……何故だ？》

『気にしないでください』

なのははそんなことを言いながら家を後にした。

幾人かの人は気づいているであろうが、高町家に絶賛居候中のユーノがなのはと一緒にいない。

彼は今人間形態で臨海公園にいた。野暮用でアースラを訪ねていたその帰りである。

「やれやれ、昼にはつくはずだったのに、夜になっちゃった」

「クソヤロウ！」

そんなユーノの隣で悪態を就いているのはフェイトである。

「お前の予定に付き合った私が馬鹿だったぜ」

「僕のせいじゃないよ！君がリンディさんとまったりしてたからだよ！」

「黙れー！」

「わー！全身から危ないオーラを出さないで！」  
そのときであった。

「！」

二人とも、伊達に魔導師ではない。

「ユーノ、気付いたか」

「うん、これは・・・」

街の中心部で魔導師同士の戦闘が展開されている。しかも大規模な。

「着いてこい、ユーノ！」

フェイトはバリアジャケットを展開してフルバーニアンになって飛翔した。

「ちょ！フェイト、待って！」

「伝説のスーパー野菜人はこの私がぶつ殺してやる」

「なんだよ伝説のスーパー野菜人って！」

話は最初に戻り、海鳴市中心部。

そこでは激しい戦闘が展開されていた。

「閣下、敵はあれ一人だけですか」

《わからぬ、しかし、もう数名いてもおかしくはないであろう・・・  
ガトー！上だ！》

間一髪、ガトーは直上から降り注ぐ紅い魔力を纏った鉄球を回避した。

その鉄球は統一された軌道をなぞり、紅い服に身を包んだ少女のもとへ帰っていく。

その少女は見た目や服装こそなのはよりもやや年下ではあるが、その雰囲気にはガトーをはるかに勝る貴禄があった。

「貴様、官姓名、所属を名乗れ」

なのははビームライフルの銃口を、紅服にピタリと合わせながら誰何した。軍人だった頃の名残である。

「貴殿に名乗る名前など無い」

「昔、会ったことはないか」

「無い」

「シリウス小隊で私の部下ではなかったか」

なのはの要領を得ない問いかけの返事は攻撃によって示された。紅い魔力弾は明らかかな意思のもと、なのはを痛め付けようと迫った。

なのはは危なげ無く上へ回避し、すべての魔力弾を撃墜する。

「話を聞く気は無いようだな・・・」

彼女は左手にビームナギナタを装備した。

ビームライフルを連射しつつ、ナギナタを回転させながら紅服にせまる。手首の構造が人間とは思えないが、それは見なかったことにしてくれ。

「！」

紅服はプロテクションでライフルの攻撃は防いだが、なのはの接近を阻止するに至らなかった。

「沈めエエエエ！」



なのはがナギナタを横に振るう。それを紅服はとつさに下へ回避した。

シュバツ！

ナギナタが捉えたものは紅服の身体ではなく、頭に被っていた可愛らしい(?)ウサギ付きの帽子であった。

「ッ！」

その時、なのはには理由がわからなかったが、紅服が激しい怒りを露にしているのが見てとれた。

紅服の瞳は完全にその色に染まっていた。

《ガトーよ。このままでは些か不味いことになるぞ》

「わかつております」

なのはは絶対に当たるようにライフルの引き金を絞った。

ビームは細かな粒子の波紋を拡げながら紅服に迫る。

このまま行けばビームは確実に紅服に命中していたであろう。

ところが、ビームは本体には当たらなかった。

「何!?!」

ビームが貫いたものは実体の無い虚像であった。紅服はそのような虚像を自分の後ろに量産しながら高速でこちらに接近していた。

「質量のある残像なのか!?!」

驚いているうちに、紅服はなのはの前に潜り込んだ。

「!?!」

「吹き飛ぶがいい!」

紅服のデバイスはゲートボールのアレ(名前は忘れた。誰か教えて)と形状は酷似していようと、真正正銘、鉄槌なのだ。

魔力によって圧倒的な力を得たそれはプロテクションを展開するなのはをいとも簡単に吹き飛ばした。

「むおおおお!?!」

近くの何処かの企業の保有するであろうビルに突っ込む。受け身の体勢も、余り意味がなかった。

すぐさま外傷や自分の意識を確認する。全く、バリアジャケット

とはなんとも優れた衣服らしい。

（できるならば、少し休憩したいところだな・・・）

だが、一息つく暇を紅服は与えなかった。

煙が晴れると、紅服が鉄槌を振りかざして迫ってくるのが見えた。とつさにライフルを構えるが間に合わない。

紅服の攻撃は今度はなのは本人の身体に命中した。息が詰まる。デスクやコンピュータをなぎ倒しながらなのは壁に激突した。

「グ・・・」

頭を強く打ったからか視界がぐらぐらする。バリアジャケットといえども完全に衝撃を吸収できたわけでは無いようだな。

そのぐらつく景色の中に紅服の姿が見てとれた。

「主のため、人を殺める事を非としてきたが・・・」

紅服が鉄槌を振り上げた。頭を割るつもりなのだろうか。

「別に貴殿が死んでもリンカーコアが残ればいいのだ」

なのはは歯を食いしばり、訪れるであろう破滅に耐えようとしたが、それは訪れることはなかった。

「・・・！」

彼女が目を開くとそこには十手で紅服の鉄槌を受け止めるフェイトの姿があった。

「くっ、貴殿、何者だ？」

フェイトはビームライフルをしまい、サーベルを抜き取って切っ先を紅服に向け、名乗った。「私は、スーパー・フェイト・テストアロツサ」

共になのはを助けに来たユーノはなのはを介抱しながら突っ込みたい気持ちに襲われた。突っ込まなかったけど。

「高町なのはを倒すのはこの私だ。貴様のような下級戦士は小指の先でも倒せる。覚悟しやがれ！」

続く

## 第五話 激突都市なの 後編

前回のあらすじ

見た目は小学生中身はアナベルの少女、高町なのははデラーズ・ハートの報せを受け、海鳴市街で謎の紅服少女と闘うも、撃墜されてしまう。

彼女に止めを刺そうとする紅服。なのはは覚悟を決めたが、そこにフェイト・テストロッサとユーノ・スクライアの二名が救援に駆けつける。

今回もまた作者的にしんどい戦闘だ！

フェイトは絶好調だった。

「バーン バーン」

黄金色のビームは紅服 ヴィータの側の空間を紙一重で貫いていく。

ヴィータはビームを避けつつ冷静に分析を行っていた。

（先の少女とは魔力的には大差はない。では、あの強さはなんだ？）  
それと、さつきからあの金髪が異常に光っているような・・・。

フェイトはこの数日間、寝ては食い寝ては食いを繰り返していたわけではない。

彼女は重力制御装置を搭載しているアースラで鍛練を重ねていたのだ。

3Gの環境での修行は地味にきつかったもののその成果は見事に現れていた。

「計算通り」

フェイトは更に追い討ちをかけるべく魔法のバズーカ（笑）を放つ。

爆風がヴィータの身体を強かに打つ。

（これでは些か分が悪い・・・ブロリー殿、ザフィーラ殿！）

ヴィータは信頼する仲間<sup>に</sup>に念話を飛ばした。

ザフィーラとブロリーは他の魔導師<sup>が</sup>いないかと裏路地を探していた。

「ブロリー、我々の親愛なるヴィータから助けて、だそうだ」

「めんどくさいー、デス」

「金髪美少女とやりあっているらしい」

「しゃぶりつくしてやるデス」

ブロリーは全身から歡喜のオーラを加湿器張りに噴出させている。

「ふむ、それでは行くとするかナ」

筋肉二人組は夜空へ飛び立った。

アナベル・ガトーはけっしてニュータイプではなかったが、子供のからだになつてから、更に魔法に出会ってから勘が鋭くなつていた。

「・・・！」

「どうしたのなの？」

今、高町なのははユーノから治療を受けている真つ最中で、周りに警戒していたところ、妙な魔力を感知したのだ。

「ユーノは、何も感じないのか？」

「いや、別に・・・」

今のユーノの頭の中は色々ショートしているのだ。

バリアジャケットは外界の様々な事柄から身を守る為のものである。

そのため、治療魔法はバリアジャケットの上からは難しいのだ。

と、言うわけでバリアジャケットを解除した状態で治療をしているのだが、なんと古傷<sup>フエイトにつけられたヤツ</sup>がパツクリ開いてしまったのだ。

ユーノは勿論、治療魔法で手当てをしようとした。

その旨をなのはに伝えると彼女は「そうか」と言つて、あろうことか上着を半分脱ぎ、半身を露にしてきたのだ。

あろうことか、といつてもなのは常識、つまりアナベル・ガト  
ーの常識から言つと怪我の治療をしやすくするために必要なことな  
のだ。

しかし、ユーノの常識から言つと魔法による治療は服越しでも可  
能であるため、肌を露にする必要はないのだ。

このときユーノは「服は着たままでいいよ」と言えば良かったも  
のを、欲に勝てずそのままにしているのだ。

傷口からは血が溢れていて非常に痛々しい。それでもユーノは血  
に侵されていない肌（特に胸元）へついつい目をやってしまいそう  
になる。一応隠れてはいるが、今にも見えそうだ。

「ン、どうしたユーノ。鼻から血が」

「気にしないでくれ。来る前にチョコを食べ過ぎたんだ」

「目も真つ赤だぞ」

「気にしないでくれ。来る前に目にケチャップが入ったんだ」

「フツ、そうか。すまないな、こんな為体ていたらくで。いずれ礼はさせても  
らう」

「いやいや、もう十分だよ」

なのはにはユーノの言っていることの意味が判らなかった。

全てのものが永遠に繁栄し続けることはない。それと同じく、ス  
ーパーフェイトさんタイムも永遠に続くことはない。

「……」

フェイトは良からぬ気配に身を震わせた。

それは正に恐怖そのもの。今までに体験したことのない恐怖が襲  
った。

「逃げるんだあ……」

彼女はヴィータ追撃を中断し、ウターンをする。が……。

身体を反転させた瞬間、目の前に巨漢　ブロリーが現れた。

「なななんだ貴様」

「ブロリー、デス。何処へ行くんだあ？」

そう言うところブローリーは否応なしにフェイトの頭を掴むと近くのビルにドヒューンと突撃し、叩きつけた。

「ほあああ!？」

ビルの外壁に激しい噴煙と共に巨大なクレーターが誕生する。

「かわいい！撫でてやる」

ブローリーの撫でる、は端から見るとただの暴力にしか見えない。

事実、そうであるが。

グリグリ。

フェイトの頭はブローリーの掌とコンクリートに挟まれつぶれそうである。

「早速（表記不能）してやる」

フェイトどころかこの二次小説まで絶体絶命である。

そこへ、救世主が舞い降りた。

ブローリーの背中を一筋の光線が焼いた。

「い、いたいーデス」

「ゴラアアアアアアアアアア！」

ブローリーは声のする方向へ顔を向けた。

そこに居たのは……。

「母さん！」

「母さん……親父いの対義語おおお！」

「愛と平和の使者、ミラクル プレシア & アルフ 参上！」

プレシアは何処からともなく拡声器を取り出すと叫んだ。

「この腐れ外道めが！ウチの娘にナニさらしとんじゃワレエエエエ」

プレシアさん、毛が逆立ってます。

[illegible]

「オバンに興味は無いーデス」

「熟女と呼べ！」

二人は天空高く舞い上がり、激しいバトルを始めた。

「・・・プレシアとロリコンはほつといて。あたしはフェイトを助けるかね・・・」

主人の母親のテンションについていけないアルフは一人で主人の救出に向かう。

しかし、それを邪魔する者が現れた。

「ザフィーラパーンチ！」

「ぶふっ!？」

不意打ちをもらにうけたアルフは軽く吹き飛ばされる。

「いつて・・・なにもんだいアンタは！」

「盾の守護獣、ザフィーラ！ザファイ様とでも呼んでくれたまえ」

「なんだ、使い魔かい」

「違う。守護獣だ」

ぶっちゃけどうでもいい、とアルフは思った。こいつはご主人の救出を邪魔する糞野郎だ。

ザフィーラはいつの間にかジョジョ立ちをしている。

「主の為だ。騎士は主の為尽くすもの・・・」

「何が騎士だ」

アルフはザフィーラのことを睨み付けてやった。

効果があるとは思わなかったが、少しでも相手をヒビらせることが出来ればかなり有利になる。

ところが、ザフィーラの示した反応はアルフが予想したあらゆる反応から数万光年離れたものだった。

「・・・美しい」

「はっ？」

「美しい！なんと芯の強い女性だろうか！貴女の主人を思う心、優しさ、それらの全てが貴女の美しさを際立たせているッ！」

「はぁ・・・」

「騎士は主人の為だけに尽くすものではない。美しいご婦人にもそれと同等に尽くすものだ。私は危うくそれを犯してしまうところだった・・・」

「ははあ・・・」

「麗しきお嬢さん！また会いましょう！」  
フロイライン

そう言うたザフィーラは狼に変身して何処か飛んでいつてしまった。

アルフはそれを啞然として見送るしかできなかった。

時は流動的なものである。

フェイトやらプレシアやらアルフやらがバトっている中、なのはとユーノはビルの屋上にいた。

「みんなが上手く時間を稼いでくれたみたいだよ」

「そうか」

なのはは今、ここ一帯を包んでいる結界を破ろうとしていた。

実はユーノとフェイトが来た後、結界が張られ、誰も侵入できなくなっていたのだ（ミラクル プレシアとアルフはこの近所に住んでいた為平気だった）。このままでは管理局の増援は望めない。

「なのは、傷は大丈夫？」

「大丈夫だ。といっても全力は出せんがな」

肩の傷が開いていなければスタアアダストオオブレイカアアア！を撃てたのだが、致し方あるまい。

今、なのははユーノからブーストを受けてビームライフルのフルチャージ版を撃とうとしているのだ。

結界の天頂をロックオンする。

なのははライフルの引き金を引こうと指をかけた。

だが、引けなかった。

「・・・どうしたの？」

ユーノが恐る恐るなのはの前へと回り込んだ。

「えっ？なんじゃこりやアアア！」

なんと、なのはの胸から腕がよきつと生えていたのだ。腕はなにかを探すようにうねうね動く。

「何このB級ホラー・・・」



と、その時、なのはがいきなり血を吐いた。

「うぷっ……」

「ぎゃー！今回出血しすぎたる！なのはアアア！」

ユーノの突っ込みを孕んだ悲鳴が夜の海鳴にこだました。

ユーノがわめき散らしているビルから2キロほど離れたビルの屋上に二人の女性がたっていた。

「リンカーコア、確保シマシタ。ディボディボ」

「うっしやあ！よくやったなシャルちゃん。早速見せてくり」  
長身のハイテンション剣士、シグナムが癒し系ロボットシャルに求めた。

シャルは通り抜けフープの発展版みたいなものでなのはのリンカーコア、すなわち魔法の源を回収していたのだ。

シャルはズボッ！という効果音と共に血の滴る腕を引き抜き、掌のリンカーコアを見せた。

「コレデゴツザイマス」

「いやいやいやいや、なんでこんなにスプラッタなことになってんの」

「マチガエチャッタ テヘエエエエ」

「かわいくねえよ……まあいいや。取り合えず、目標は達成したっしょ。帰るか！」

シグナムは他のメンバーに終わったことを伝えた。

続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5500y/>

---

魔法少佐アナベル・ガトー

2012年1月5日19時51分発行